福岡市西区

原深町遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第71集



1981

福岡市教育委員会

福岡市西区

原深町遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第71集

1981

福岡市教育委員会

序 文

近年 市周辺部における都市化の傾向は留まるところを知らぬものがあり、これに伴い自然の景観も大幅に変容しつつあります。

今回の発掘調査は、このような人口の増加に伴う、児童生徒の急増に対処するため、昭和55年4月に開校された飯原小学校の建設地内に所在する遺跡であります。

本書が市民各位の文化財保護及び学術研究の分野において 役立つことを念願いたしますとともに,調査に際してよせら れた多くの方々のご協力に対し心から謝意を表する次第であ ります。

昭和56年3月

福岡市教育委員会 教育長西 津 茂 美

凡 例

- 本書は、昨年4月に開校された飯原小学校の建設に伴い、福岡市教育委員会文化課が1979年8月21日から同年12月20日にかけて発掘調査を行なった福岡市西区原深町遺跡の発掘調査報告書である。
- 遺跡が福岡市西区大字原字深町に位置する ため、遺跡名を『原深町遺跡』とする。
- 遺跡の発掘調査には、福岡市教育委員会文 化課の飛高憲雄、力武卓治、古藤国生(事 務担当)が当り、本書の執筆・編集は飛高 憲雄、力武卓治が行なった。
- 本書の作成には、次の方々のご協力を得ました。ここに氏名を記して感謝の意を表します。(敬称略)

荒津孝治 安東昇 岩永真弓
江越初代 河野徹也 関加代子
関直樹 関政子 武本延子
藤たかえ 中村満代 花畑照子
広田清美 藤田太 溝口博子
実渕栄治 安武裕子 山内タツ子

福岡市西区 原深町遺跡

目 次

	序文
	凡例
I	はじめに(9)
	1. 調査に至る経過(9)
	2. 調査協力者(10)
	3. 遺跡の位置(10)
	4. 発掘調査の経過と遺跡の概要 (10)
II	遺構(15)
	1. I区, II区·············· (15)
	2. 胍区(17)
	3. № ⊠······ (20)
	4. $V \boxtimes$, $V I \boxtimes$, $V I \boxtimes$
III	遺物
	1. 土器
	2. 石器, その他(104)
	3. 木器(119)
IV	おわりに(121)

挿 図 目 次

1	原深町遺跡周辺遺跡分布図(縮尺½5,000)(11)
2	原深町遺跡地形図(縮尺1/5,000)(12)
3	原深町遺跡発掘区平面図(縮尺1/1,000)・・・・・・・・・・(14)
4	原深町遺跡遺構配置図 (縮尺У500)折り込み
5	第 1 号溝土層図(縮尺¼) (15)
6	I 区全景(南から) (15)
7	II区全景 (南から)
8.	第1号溝土層(16)
9	第1号溝遺物出土状況(16)
10	Ⅲ区全景(南から) (17)
11,	第1号溝杭列遺構実測図(縮尺划) (18)
12	第1号溝杭列遺構出土杭実測図(縮尺½)(19)
13	第1号溝杭列遺構(南西から)(19)
14	Ⅳ区全景(南東から)(20)
15	Ⅳ区全景(西から) (20)
16	第1号堰(西から)・・・・・・・・・・・・・・・・・(21)
17	第1号堰(21)
18	臼出土状況
19	V · VI区全景(北から) · · · · · · (22)
20	第1号堰と取水口(22)
21	VI区大溝土層 (縮尺½)
22	WI区大溝土層 (南から) (23)
23	VII 区大溝土層図 (縮尺 ½) ·······(23)
24	WI区大溝土層(西から) · · · · · (23)
25	第 2 号堰全景(北から) (24)
26	第 2 号堰全景(南東から)(24)
27	第2号堰実測図(縮尺¼)・・・・・・・・折り込み
28	第 2 号堰全景(西から) (25)
20	第9号框細部(25)

30	第 2 号堰土器出土状況(25)
31	第2・3・4号溝土器出土状況(南西から)(26)
32	第 4 号溝木器出土状況(26)
33	大溝土器出土状況(27)
34	大溝土器出土状況(27)
35	大溝木器出土状況(28)
36	大溝木器出土状況(28)
37	第7号溝木器出土状況(28)
38	大溝木器出土状況(29)
39	大溝木器出土状況(29)
40	大溝木器出土状況(29)
41	V · VI · VII区全景(東から) ····································
42	原深町遺跡出土土器実測図 ① (縮尺½)(32)
43	原深町遺跡出土土器実測図 ② (縮尺½)(33)
44	原深町遺跡出土土器実測図 ③ (縮尺½)(34)
45	原深町遺跡出土土器実測図 ④ (縮尺½)(35)
46	原深町遺跡出土土器実測図 ⑤ (縮尺½)(36)
47	原深町遺跡出土土器実測図 ⑥ (縮尺½)(37)
48	原深町遺跡出土土器実測図 ⑦ (縮尺½)(38)
49	原深町遺跡出土土器実測図 ⑧ (縮尺½)(39)
50	原深町遺跡出土土器実測図 ⑨ (縮尺½)(40)
51	原深町遺跡出土土器実測図 ⑩ (縮尺½,½) (41)
52	原深町遺跡出土土器実測図 ⑪ (縮尺½,½) (42)
53	原深町遺跡出土土器実測図 ⑫ (縮尺⅓)(43)
54	原深町遺跡出土土器実測図 ③ (縮尺⅓)(44)
55	原深町遺跡出土土器実測図 ⑭ (縮尺½)(45)
56	原深町遺跡出土土器実測図 ⑤ (縮尺½)(46)
57	原深町遺跡出土土器実測図 ⑯ (縮尺⅓)(47)
58	原深町遺跡出土土器実測図 ⑰ (縮尺½)(48)
59	原深町遺跡出土土器実測図 ⑱ (縮尺⅓)(49)
60	原深町遺跡出土土器実測図 ⑲ (縮尺⅓)(50)
61	原深町遺跡出土土器実測図 🚳 (縮尺%) (51)

62	原深町遺跡出土土器実測図	② (縮尺⅓)	(52)
63	原深町遺跡出土土器実測図	② (縮尺⅓)	(53)
64	原深町遺跡出土土器実測図	② (縮尺%)	(54)
65	原深町遺跡出土土器実測図	② (縮尺⅓)	(55)
66	原深町遺跡出土土器実測図	◎ (縮尺½)	(56)
67	原深町遺跡出土土器実測図	② (縮尺⅓)	(57)
68	原深町遺跡出土土器実測図	② (縮尺⅓)	(58)
69	原深町遺跡出土瓦実測図(編	縮尺⅓)	(58)
70	原深町遺跡出土土器 ①	(縮尺⅓)	(59)
71	原深町遺跡出土土器 ②	(縮尺⅓)	(60)
72	原深町遺跡出土土器 ③	(縮尺½)	(61)
73	原深町遺跡出土土器 ④	(縮尺½)	(62)
74	原深町遺跡出土土器 ⑤	(縮尺½)	(63)
75	原深町遺跡出土土器 ⑥	(縮尺½)	(64)
76	原深町遺跡出土土器 ⑦	(縮尺½)	(65)
77	原深町遺跡出土土器 ⑧	(縮尺%)	(66)
78	原深町遺跡出土土器 ⑨	(縮尺%)	(67)
79	原深町遺跡出土土器 ⑩	(縮尺%)	(68)
80	原深町遺跡出土土器 ①	(縮尺½)	(69)
81	原深町遺跡出土土器 ②	(縮尺%)	(70)
82	原深町遺跡出土土器 ③	(縮尺%)	(71)
83	原深町遺跡出土土器 ⑭	(縮尺%)	(72)
84	原深町遺跡出土土器 ⑤	(縮尺½)	(73)
85	原深町遺跡出土土器 16	(縮尺⅓)	(74)
86	原深町遺跡出土土器 ⑰	(縮尺%)	(75)
87	原深町遺跡出土土器 18	(縮尺%)	(76)
88	原深町遺跡出土土器 19	(縮尺%)	(77)
89	原深町遺跡出土土器 ⑳	(縮尺%)	(78)
90	原深町遺跡出土土器 ②	(縮尺%)	(79)
91	原深町遺跡出土土器,瓦 ②	(縮尺%)	(80)
92	原深町遺跡出土石器実測図	① (縮尺½)	(85)
9,3	原深町遺跡出土石器実測図	② (縮尺½)	(86)

94	原深町遺跡出土石器実測図	③ (縮尺½) (87)
95	原深町遺跡出土石器実測図	④ (縮尺½) (88)
96	原深町遺跡出土石器実測図	⑤ (縮尺½) (89)
97	原深町遺跡出土石器実測図	⑥ (縮尺½)(90)
98	原深町遺跡出土石器実測図	⑦ (縮尺½) (91)
99	原深町遺跡出土石器実測図	⑧ (縮尺½)(92)
100	原深町遺跡出土石器実測図	⑨ (縮尺½)(93)
101	原深町遺跡出土石器実測図	⑩ (縮尺½)(94)
102	原深町遺跡出土石器実測図	① (縮尺½,⅓) (95)
103	原深町遺跡出土石器その他等	実測図(縮尺¾)(96)
104	原深町遺跡出土石器 ①	(縮尺½)(97)
105	原深町遺跡出土石器 ②	(縮尺½)(98)
106	原深町遺跡出土石器 ③	(縮尺½)(99)
107	原深町遺跡出土石器 ④	(縮尺½)(100)
108	原深町遺跡出土石器 ⑤	(縮尺½)(101)
109	原深町遺跡出土石器その他	6 ······(102)
110	原深町遺跡出土石器 ⑦	(縮尺½)(103)
111	原深町遺跡出土木器実測図	① (縮尺¼)(106)
112	原深町遺跡出土木器実測図	② (縮尺¼)折り込み
113	原深町遺跡出土木器実測図	③ (縮尺½,½,%)…折り込み
114	原深町遺跡出土木器実測図	④ (縮尺¼)折り込み
115	原深町遺跡出土木器実測図	⑤ (縮尺¼)折り込み
116	原深町遺跡出土木器実測図	⑥ (縮尺¼)(107)
117	原深町遺跡出土木器 ①	(縮尺¼)(108)
118	原深町遺跡出土木器 ②	(縮尺¼)(109)
119	原深町遺跡出土木器 ③	(縮尺¼)(110)
120	原深町遺跡出土木器 ④	(縮尺¼, ½)(111)
121	原深町遺跡出土木器 ⑤	(縮尺¼, ½)(112)
122	原深町遺跡出土木器 ⑥	(縮尺½, ¼)(113)
123	原深町遺跡出土木器 ⑦	(縮尺½)(114)
124	原深町遺跡出土木器 ⑧	(縮尺¼)(115)
125	原深町遺跡出土木器 ⑨	(縮尺¼)(116)

126	原深町遺跡出土木器 ⑩	(縮尺¼)(117)
127	原深町遺跡出土木器 ①	(縮尺¼)(118)
128	原深町遺跡出土木器 ①	(縮尺½)(119)

Iはじめに

福岡市の人口が 100万をこえたのは、つい数年前のことであったが、それ以後も都市化の波にのって住宅建設が相次ぎ、人口も増加を続けている昨今である。この人口の増加は、そのまま児童数の増加でもあり、福岡市では毎年、学校の新設に追われているのが実状である。

福岡のまちは、福岡平野とよばれる沖積地がそのかなりの面積を占めているため、学校等の建設に利用されるのも、まず、これらの沖積地である。そして沖積地であるが故に、それらの土地は多くの場合、現在に至るまで水田として利用されている。そのために埋蔵文化財の実態も不明なところが多いというのも実状である。その点で、沖積地の再開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、考古学上の新知見を提供するという派手さはあるが、その反面、計画が確定すると、学校のような校区に規制される公共施設の場合には、用地の変更がほとんど困難であるということで、埋蔵文化財の将来への保存は不可能となり、また、発掘により出土する自然遺物の処理、あるいは木製品の保存技術がいまだ不完全な現在では、ただ単に掘り出すことに終始するというのも否めない事実である。

1. 調査に至る経過

児童数の増加によって小学校の新設をせまられた福岡市西区飯倉地区では、1980年の4月開校をめざしてその用地を西区原七丁目 600に決定し、建設計画が進められた。この飯原小学校建設予定地は、かつて、国家公務員宿舎の建設用地に予定されたおりに、旧水田面の上にすでに高さ1m前後の埋め立てがなされており、現地踏査では地下の遺跡の有無も確認できなかったため、本調査に先立つ2か月余り前の1979年6月11日から同14日にかけて、同地の試掘調査を行なった。

学校建設予定地の東側には、北の博多湾に向かって流れ、河口で室見川と合流する幅20mほどの稲塚川がある。そのため、当然ながらその西側は、川の氾濫をうけていると考えて、稲塚川に直角に、すなわち東西方向に、20mの間隔をとって数本のトレンチを設定し、遺構・遺物の有無を調べた。

その結果、学校建設予定地内の北西から南東にかけて微高地が延びており、そこには約2mの間隔で2条の溝状遺構(時期は古墳時代初期)が東の縁に沿って走り、予定地の東部は予想どおりに稲塚川の氾濫を受けており、遺構は確認されなかった。そして、溝状遺構には杭列が残されており、また、微高地の縁でも杭列が確認された。すなわち、原深町遺跡は、古墳時代

初期の農業用水路を中心とした遺跡であろうという予測を立てるのに充分であった。

この試掘調査の結果にもとづいて、福岡市教育委員会文化課は、開発面積17,000㎡の内、約3,000㎡を本調査の予定範囲として、1979年8月21日から年内の調査完了をめざして発掘調査を開始するように決定した。

2. 調查協力者

原深町遺跡の発掘調査を行なうにあたっては、福岡市教育委員会の関係各位の外に、次の方方の絶大なるご協力を得て、当初の予定どおり年末まぢかの12月20日をもって終了した。ここにご協力くださった方々の氏名を記して厚くお礼申し上げます。(敬称略、順不同)

下田モト 西滝三郎 松隈ユキノ 野田部コト 菰田重実 牛尾進一 牛尾クメ 青柳ツル 菰田オリエ 谷ヒサヨ 榊光雄 榊ツイ 池八重 坂口キミ子 尾崎達也 典略初 結城シズ 尾崎八重 結城君江 高田政枝 松尾久代 松尾君子 又野栄子 松尾鈴子 小林美恵子 田中ヤス子 菊地ミツヨ 伊藤みどり 舎川春江 結城千賀子 岩崎千晶 木内克之 木内潤子 溝口博子 柴田勝子 井上清子 山口富子 小林邦子 岩永真弓 高尾英幸 白澤勝典 高尾裕 河野徹也

3. 遺跡の位置

福岡沖積平野の西部のいわゆる早良平野は、室見川とその支流によって形成された扇状地形を呈している。原深町遺跡は、室見川の東約2kmで、国道202号線バイパスの原交差点の南南東約0.6kmの西区大字原字深町(現、西区原七丁目600)に位置する。遺跡地は、高さ1m前後の埋め立てによって現在は標高6.4m前後となっているが、以前は長きにわたって水田として利用されていた。東に稲塚川が流れ、川をはさんでその東には福岡市立原中学校がある。原深町遺跡の東方1kmの位置には南北に延びる飯倉、茶山の丘陵があり、西には、原の微高地が、さらに西方には金屑川を間にはさんで、有田遺跡群をのせる有田・小田部の台地が開けている。

原深町遺跡周辺の水田地帯も再開発による住宅建設等が相次ぐが、埋蔵文化財の実態に関しては今のところ不明な点が多い。唯一いえることは、この一帯の水田畦畔には、条里制の遺構が比較的整然としのばれるということであろうか。

4. 発掘調査の経過と遺跡の概要

発掘調査に先立って試掘時に設定したグリッドの残り杭を基準にして、調査対象地域に20m 方眼のグリッドを改めて組みなおす。南北の軸が磁北に対して約5度ほど西に片寄っていたが、





2 原深町遺跡地形図 (縮尺1/5,000)

そのまま利用する。西から A、B、C、……、北から I、II、III、……として調査区の表示とした。 I 区から IV 区の一部にかけては、校舎建築のため最優先して調査を進めなければならないということで、調査方法を検討した結果、調査順序を I 区、III・IV 区、II 区とし、それぞれ調査の終了した調査区から埋め戻すという方法をとった。

遺跡地が沖積地であるため、湧水の処理に最も悩まされたが、I区からIV区にかけては、このような小規模の調査区で発掘を進めたということで、結果的には排水作業時の余計なエネルギーを省力化できた。

Ⅳ区の残りから V区、 W区、 WI区の調査は、試掘時の所見で当遺跡には溝状遺構が含まれているということで、上流に当る WI区から進めた。

以下に、各区ごとの調査経過と遺跡の概要を、調査の順序にしたがって略記したい。

I 区 I区は安全対策上、北側6 mほどは未調査であるが、試掘時の所見どおり、IA区とIB区との境に北西から南東に走る微高地の縁と、その内側約3 mの位置に縁と平行に1号 溝が検出される。

II 区 I区、Ⅲ区の調査が終了し、排土を埋め戻した後に調査したが、ここでも試掘時の所見と違わず、微高地の縁がⅡB区の中央を北西から南東に走ることがわかり、その縁に沿って溝状遺構が1条検出される。1号溝である。

III 区 III区はII区の調査に先立って実施したため、I区で検出された溝状遺構がどのような位置から、あるいは、I区で検出されなかった新たな溝状遺構が、みつかるのではないか等等、さまざまな期待をもって発掘調査が行なわれたが、試掘時の所見どおりに、I区の溝状遺構の延長上に溝状遺構がくることが確認される。

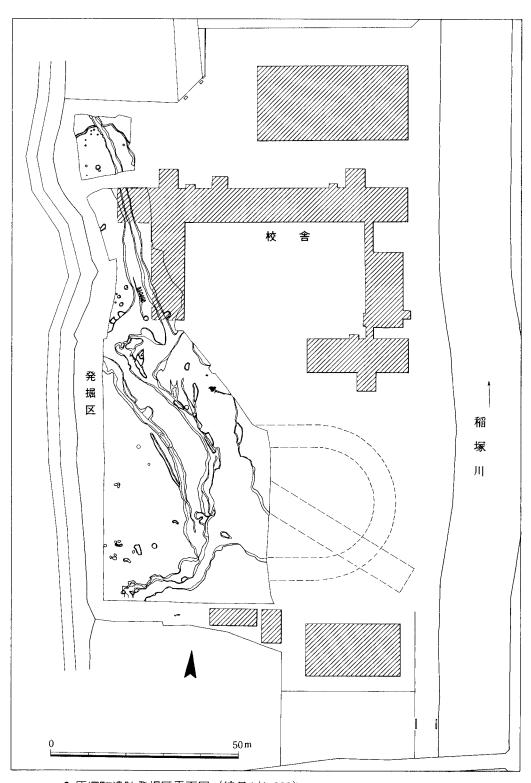
Ⅳ 区 Ⅳ区は、北から7mの範囲のみを、校舎建設の関係上まず調査した。Ⅲ区同様、試掘時に予想されたとおりの所見を得る。特に1号溝の南端部において杭列が検出される。

▼ 区 調査区南端に当り、試掘時の所見によるとI区等で検出された1号溝上流部と、さらに2mほど西隣りにも1条の溝状遺構があるとのことで、まずこの点を確認する。その結果、西側の7号溝のみ検出され、▼ B区から▼ C区にかけて大きく東に蛇行し、▼ C区に向かって走ることがわかる。▼ C区では、7号溝の左岸中段から5号溝が北北西に向かって始まる。

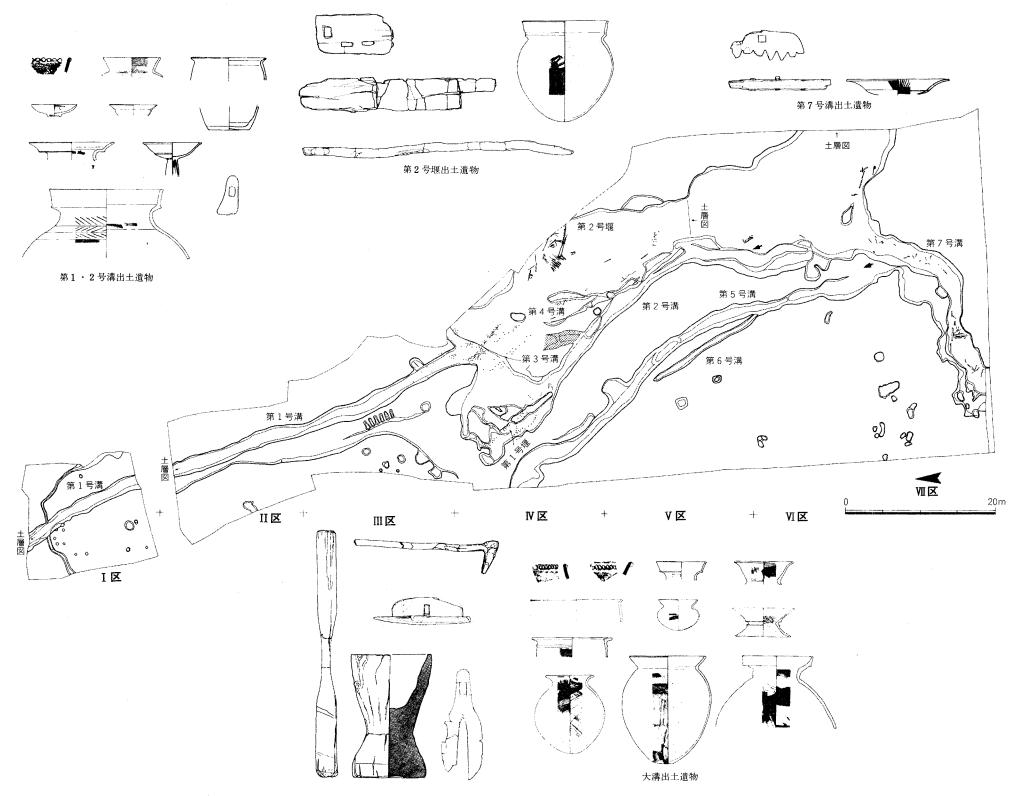
Ⅵ 区 5号溝にVB区から始まる6号溝が合流し、大溝から2号溝がV区へ向かう。

V 区 2号溝が北西へ走り、これから分岐した3号溝が北へ向かう。2号溝の北3mの位置からは、4号溝が北へ走り、これに伴うと思われる堰が大溝で検出される。

Ⅳ 区 北部は校舎建築に合わせて、すでに調査済であったので、ここでは、これまでに検 出された溝が上流部と下流部とでどのようにつながるかが興味深いところであったが、結果と しては大変複雑な様相を呈する。遺構の項で詳述する。



3 原深町遺跡発掘区平面図(縮尺1/1,000)



4 原深町遺跡遺構配置図(縮尺1/500)

II 遺 構

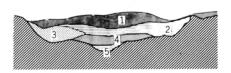


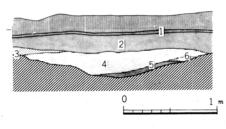
V区の調査風景と第2号堰を北西から見る

II 遺 構

1. I 区, II 区

I区は校舎敷地の北西隅にあたり、20×20mの 400㎡グリッドを設定したが、盛土崩壊の安全対策で南北18m×東西15mの 270㎡を発掘した。耕作土の上は1m以上の厚さで埋め立てられており、この土を重機で剝ぐことから作業を開始した。I区の土層は、耕作土、床土の下に粘質茶褐色土が約20㎝の厚さで堆積し、この下が灰茶色の粘土層で、この層が地山となる。I





5 第1号溝土層図 (縮尺¼)

区の発掘では試掘調査で検出されていた溝状の落ちこみが北西から南東方向に現われた。この落ちこみは灰茶色粘土層を切りこんでおり、I区での全長は16mである。落ちこみの断面は砂質土と泥炭が互層をなしており、夜臼式土器や土師式土器などの遺物を包含している。これらの遺物は層位的にとらえられない。落ちこみの幅は約2mで南東から北西に向けて傾斜しており、底部はやや凹凸がめだつ。I区のみでは自然的なり、底部はやや凹凸がめだつ。I区のみでは自然的な時期に水が流れていた溝と考えられた。I区ではこの溝の外に数個の円形ピットを検出した。円形ピットの



6 I区全景(南から)

性格は不明であるが、弥生式 土器、石器などが出土してい る。I区の東端部は地山が急 に傾斜し、粘質黒色土となり、 試掘調査の報告からも稲塚川 の氾濫原と考えられ、また校 舎の建設も進み発掘調査がで きない状況であったために東 側へは拡張しなかった。



7 II区全景(南から)



8 第1号溝土層

第1号溝の土層表

	I 区	II 区	
1	砂質黒褐色土層	1 耕作土	
2	粘質黑色土層 (泥炭)	2 粘質茶褐色土層	
3	砂 層	3 粘質暗茶褐色土層	
4	砂層	4 粘質黑色土層 (泥炭)	
5	粘質黑色土層 (泥炭)	5 砂質黒色土層	
		6 粘質黑色土層	

▶9 第1号溝遺物出土状況

遺物は溝断面の上・下に関係なく出土する。挿図9は溝底で発見した木製鍬(W3)と土師式土器(185)の出土状況を示している。鍬は頭部のみで腐蝕が進んでいる。 I~II区の第1号溝には流木はほとんど見られない。

II区は I区の南に 3 mの間 隔をおいて設定した発掘区で ある。発掘区は東西13m×南 北16mの 208㎡である。床土 下から地山まではI区と大差 なく約20cmの深さである。 I 区で南東方向に延びていた溝 はII区でもその延長線上で検 出された。溝の幅は約2mで 溝の断面はゆるやかな逆台形 状をなしている。溝の土層は 上層が泥炭で, 溝の底部には 砂質黒色土が堆積している。 地山の粘質土は I 区と比べ青 灰色となり, 粘着力が強い。 このため溝の肩部も明瞭とな っている。溝は北西端部とほ ぼ同じ幅でさらに南東方向に 延びている。溝からの出土遺 物は多様であるが層位的には 区別できなかった。



2. III 区

Ⅲ区は II 区の南に接して設定したもので、南北25 m×東西20 mの 500㎡の面積である。この 発掘区までが校舎建設の予定地となってい た。 I 区, II 区で幅 2 m で南東に延びていた溝は, Ⅲ区でも検出された。Ⅲ区での長さは約27mで、I区からの総延長は65mを測る。溝の幅は約 2mでⅠ区での溝幅とほとんど大差はないがⅢ区南東隅でやや広くなり,浅くなっている。こ の南東隅の溝両岸には矢板と芯持ち丸太材、割材の杭が多数打ち込まれており、流れに対する 護岸用杭列と考えられた。Ⅰ~Ⅲ区の溝に護岸用杭列が存在することから,溝が人為的な掘削 であるかは明らかにしえないが、水に対するある程度の制御がなされたことは明確となり、第 1号溝と遺構名を付した。第1号溝の土層, 断面形などは I・II 区と比べ大きく異なる点は指 摘できないが、溝底はⅠ・Ⅱ区が青灰色粘土層であったのに対し、Ⅲ区では砂層となっている。 前述の杭列はこの砂層に打ち込まれている。第1号溝の東側はほぼ平坦となっているが,西側 は西に向かって高くなっており、2つの段がある。溝に近い段には7つの長楕円形のピットが 並んでいる。2段目上にも大小の円形ピットが検出された。これら2つの段はN区へは延びて いずしだいに平坦となり消えている。Ⅲ区の南壁で東西に蛇行した溝を検出し,第2号溝とし た。第1号溝より出土した土器は夜臼式土器(6・8), 弥生式土器(44), 土師式土器(91・ 115等), 須恵器 (249) などで, 土師式土器が大多数を占めている。第1号溝西側は地山上 に粘質暗茶褐色土層があり、破片であるが多くの遺物が出土した。特に馬歯と整理時に確認さ れたのであるが赤焼土器の出土は注目される。この外に土師器の高台付椀や布目瓦などがあり、 明らかに第1号溝よりも新しい様相を持っている。第2号溝からは複合口縁壺(75・113)や須 恵器 (248) などが出土した。

▶ 10 III区全景(南から)

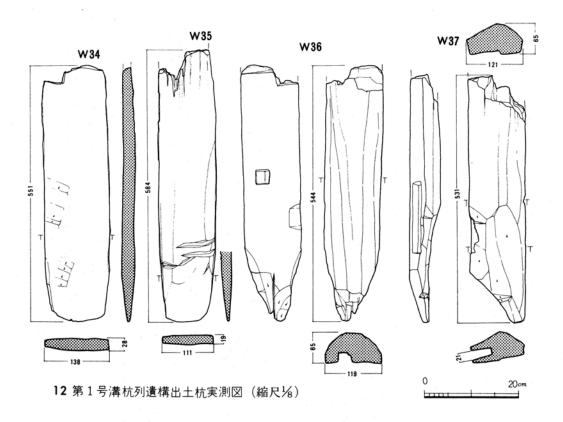
校舎建設に追われすでにI・II区は埋め立てられている。 第1号溝の湧水は少なく,溝 底のレベルは北と南では大き な差はない。第1号溝西岸に は足跡状の落ちこみが無数に 見られたが福岡市博多区の板 付遺跡や那珂深ヲサ遺跡のよ うに明瞭でない。





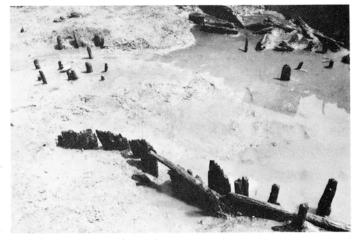
11 第1号溝杭列遺構実測図 (縮尺½)

挿図11はⅢ区南東隅で検出した第1号溝の杭列である。校舎建設と並行してのグリッド発掘だったために、4 m四方の実測図であるが杭列は次のⅣ区にも延びている。西岸には30本以上の杭が打ち込まれ、長さ約80cmの丸太材が、横木として立杭の間にわたされている。横木と立杭とは特別に結びつけられた痕跡は見られない。立杭には板材、芯持ちの丸太材、割材の三種類が見られる。杭の長さは頭部が腐蝕しており、本来の長さではないが、25~70cmを測る。東岸の杭列は、西岸ほど規則性がなく本数も少ない。溝の中にも杭が数本打ち込まれており、ここに流木が見られ、頭部を加工した木器(W20)も出土した。立杭は西岸の4本を実測した。



W34~37は第1号溝の西岸に打ち込まれていたものである。W34・35は板材で先端部は矢板 杭のように両側面からの削りはない。W34は長さ 551mm, 幅 138mmあり, 両面に細かな削り痕 が見られる。W35は長さ 584mm, 幅 111mmで, 両面ともに腐蝕し加工痕は見られないが, 先端 部近くに傷が数か所ある。W36は丸太½ほどの割材である。樹皮側は明瞭でないが細長く面取

りが行なわれている。芯側は 平坦となっており、ほぼ中心 に31×31mm、深さ21mmの方形 孔がある。杭の先端の加工は 鋭利である。W37は側面に21 × 153mm、深さ43mmの長方形 の孔がある。断面は山形をな し全面が加工されている。W 36・37は建築材からの転用で あり、W34・35もその可能性 がある。



13 第1号溝杭列遺構(南西から)

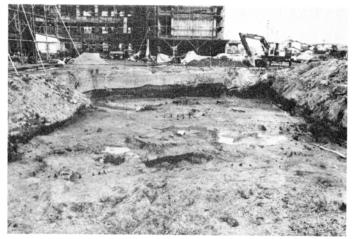
3. IV 区

Ⅲ区の南に接して設定したもので南北11m,東西27m,297㎡の発掘区である。発掘区は西側に向かって高くなっており,西側との差は75cmある。 I~Ⅲ区で検出した第1号溝はⅢ区南東隅で幅広くなり,ここに護岸用杭が打ち込まれていたが,Ⅳ区では両岸とも明瞭な肩がなく平坦となっている。杭は160数本が砂礫層に打ち込まれている。杭の頭部は腐蝕しており,平均長は約50cmである。杭列は3列あり,東より1列目は60数本の杭でⅢ区第1号溝西岸の延長線よりもやや東に寄っている。2列目は第1号溝西岸の延長線上にあるもので杭の本数は少なく,その間隔も大きい。3列目は,2列目より西に2.5mの位置にあり,20数本の杭が約50cm間隔

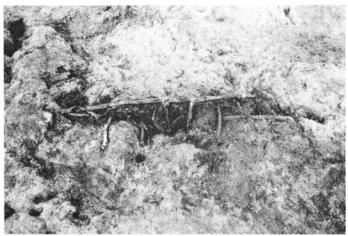
で打ちこまれている。2・3 列目の杭は同一方向で南東方 向に延びている。1・2列目 の杭列は,第1号溝に伴うも のと考えられるが、2列目は 後述するⅣ区第3号溝の北西 延長部にあたっている。第2 号溝はⅢ区で東西方向に10m 検出していたが, №区ではそ の西端部で南西に屈曲し、さ らに湾曲しながら南東方向に 延びている。**N**区での第2号 溝は幅約2 m, 深さ約30cmを 測る。杭列は両岸と溝中央に 3列が見られる。第2号溝の 西岸には長さ約 1.8mの小規 模な第1号堰が構築されてい る。またⅢ区への屈曲部には 粘土の土止めがしてあった。 Ⅳ区の南西隅には西に大きく 湾曲する第5号溝があり、深 さは10cmである。須恵器が出 土した。



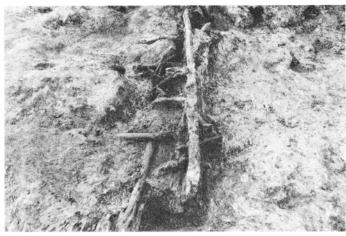
14 Ⅳ区全景(南東から)



15 Ⅳ区全景(西から)



16 第1号堰 (西から)



17 第1号堰



18 臼出土状況

第1号堰

第1号堰はⅣ区第2号溝の 西岸で検出したものである。 現形は腐蝕や土圧のためにお しつぶされているが、本来は 長さ 1.7mの横木を、両側か ら杭を交差させて押え、その 間には小枝や草茎類をつめた ものと考えられ、きわめて単 純な構造である。第2号溝は 大溝からVI区で取水されたも のと思われ、第1号堰と、第 2号溝北端部に土止めするこ とで水流を調整していたよう である。さらにここよりあふ れた水は I~III区の第1号溝 に流れこんでいたのではなか ろうか。

Ⅳ区での出土遺物は, 夜臼 式土器, 弥生式土器, 土師式 土器, 須恵器, 石器, 木器な どで、これらは混在して出土 し、各溝の時期は決めがたい。 挿図18はIV区南東隅で検出し た臼の出土状況を示している。

I~Ⅳ区までは校舎建設と 並行しての調査で、 IV 区発掘 中は既に I ~Ⅲ区は埋め立て られているという状態であっ た。このため遺構の広がりは 図上でしか把握できず、調査 上問題を残すことが多かった。

4. V 区, VI 区, VII 区

I~Ⅳ区までは校舎建設と並行しての発掘だったために結果的には溝の下流から上流方向に 掘り進んでいたが、溝は第1・2号溝のみではなく、堰などの遺構も検出され、この外にも用 水施設等の存在が予想されたので、南側の上流部から発掘することにし、また、校舎建設に伴 い大型トラックの出入りがはげしく、この安全対策上からも南側の発掘区に移動することにし た。この発掘区をWI区としたが、各発掘区ごとに遺構番号を付したために整理時に挿図4のご とく変更した。V~M区は南北58m, 東西44mの約 2,500mある。検出遺構は, 第2号溝の南 東延長部と、第2溝より別れた第3号溝、同じように第5号溝の南東延長部と第5号溝より別 れた第6号溝、さらに原深町遺跡での主流と考えられる大溝と、これに流れこむ、第7号溝の

各溝と,大溝に構築された堰 などである。

第2号溝はⅣ区で長さ約11 mを検出していたが、さらに 南東方向に延び、 V·VI区で は南に湾曲して弓状に延び大 溝に接している。Ⅳ区とV区 の境界部にも溝の中に杭が打 ち込まれており水量を調整し ているようである。V区では 第2号溝から第3号溝が別れ ており、第3号溝には粘土の 土止めが見られた。第4号溝 の延長線上に第1号溝の杭列 が並んでいる。第5号溝もⅣ 区から弓状に湾曲してⅧ区の 第7号溝まで延びている。第 6号溝はⅥ区で第7号溝より 別れた溝で全長16m,幅約90 cmを測る。第7号溝は南西か ら蛇行して大溝に合流してお り, 流木が多く見られた。



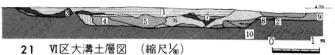
▲19 V·VI区全景(北から)

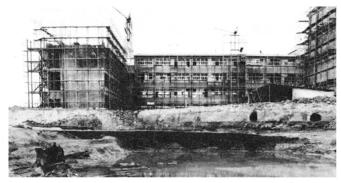


▼20 第1号堰と取水口

大 溝

大溝と名を付した遺構 は、 V~ WII 区で検出した 溝である。検出した全長 は約45m,幅は最大部で 13m, 最小部で6mを測 る。大溝はⅧ区で湾曲し て北向きとなっているが Ⅷ区より東側は試掘調査 および今回のトレンチ掘 りでも現在の稲塚川に接 していることは明らかで ある。溝の両岸は茶色を おびた灰白色粘土層で堅 く安定した土層である。 このためか, 両岸には護 岸用杭列と思われるもの は少なく、わずかにV区 西岸に見られたにすぎず, 東岸は皆無であった。V 区の北端部には横木と立 杭で構築した堰があり, この堰で水位をあげ、第 2・5号溝に分水したも のと考えられる。ただし, 後述するが、VI・VII区の 土層図でも観察できるよ うに,大溝の最終的な流 れは、 西岸の方に寄って おり, 現在の大溝の幅よ りさらに狭かったことが 推測される。

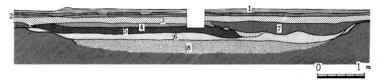




WI区大溝土層(南から)

- 1 粘質暗黒色土
- 6 砂質灰黒色土
- 2 砂質黒灰色土
- 7 砂層
- 3 砂質黒色土
- 8 灰黒色土
- 4 粘質黒色土
- 9 砂層

- 10 青灰色粘土



23 VII区大溝土層図 (縮尺‰)



24 WI区大溝土層(西から)

- 1 耕作土,床土
- 2 黄茶褐色土
- 3 粘質茶褐色土
- 4 粘質暗黒色土
- 5 砂質黒色土
- 6 砂質灰黒色土
- 7 砂質黒色土
- 8 砂層

第2号堰(25~30)

第2号堰は大溝を横切るようにして構築されているが、大溝の両岸の方向が、ほぼ北を向いているのに対して、堰の横木は直角ではなく東岸から 108度と開いている。第2号堰の検出時の状況は挿図25~28のごとくであるが、堰に向かって左側は長さ約 1.8mの杭が先端を上流に向けてほぼ水平に並んでおり、土圧で押し倒されたものと思われる。堰が構築されている大溝の底部は砂礫層となっているが、西側が高く東側に深くなっており、先の水平に並ぶ杭は砂礫層のため深く打ち込めなかったのであろう。一方東岸近くの杭は全長1m程あり構築時の原形を残しているものと考えられる。堰が東岸と接する部分は約20cmが発掘区よりはずれているが、堰の全長(横幅)は 6.5m, 幅(奥行) 1.2mを測る。検出時の堰構築材の数量は、立杭が20

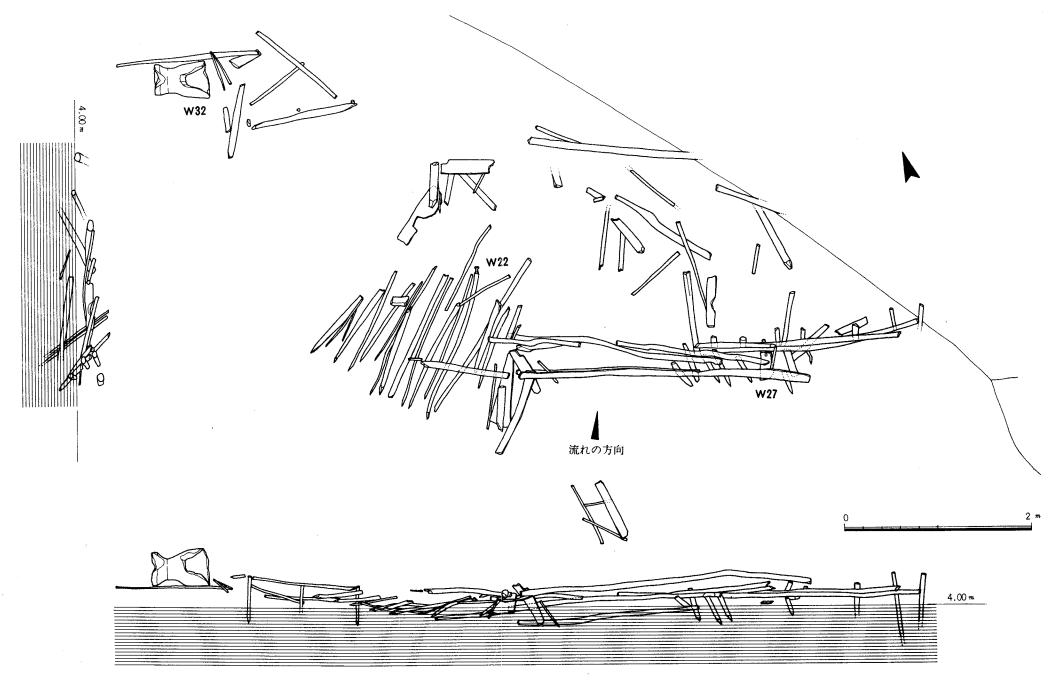


25 第2号堰全景(北から)

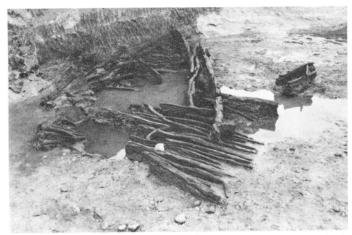


26 第2号堰全景(南東から)

数本(西側の水平の杭はのぞ く)、横木が7本である。立杭 に使用されている材には, 芯 持ちの丸太材, 丸太の割材, 板材などで、長さは20cmから 100cmと統一性はなく, また 板材は建築材からの転用され たものが多い。横木の長さは 1 mから 3.1mまでで、直径 は10cm足らずと細い芯持ちの 丸太材が用いられている。立 杭は、現在下流側に36度と傾 いているが水圧を考慮すれば 垂直に近い角度で打ち込まれ ていたのであろう。堰の高さ は約50cmを測る。横木と立杭 とは特別に固定した痕跡はな く、また横木と立杭との間に 小枝を埋めているものの、そ の数は多くない。堰の前,背 面には流木があるが、堰の背 面に多く見られた。これら検 出時の状況から堰の構築方法



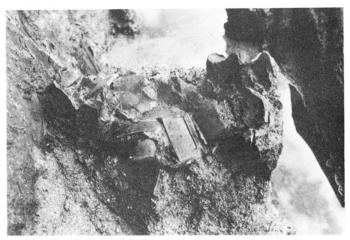
27 第2号堰実測図(縮尺場)



28 第2号堰全景(西から)



29 第 2 号堰細部



30 第2号堰土器出土状况

と順序は次のように考えられ る。まず溝を横切って長さ約 1.5mの杭を間隔10~40cmで 垂直に打ち込む。横木の両端 となる部分は特に立杭を密に する。次に長さ約2~3mの 横木をわたし、横木の前にも 杭を打ち込み横木を固定させ, この前面30cmにも同じ順序で 立杭で横木を固定する。横木 と立杭の間には小枝をつめて 目つぶしを施す。また西岸部 には長さ 1.8mの杭を柵状に 打ち込み水の流失を防ぐ方法 をとっている。以上が現況か ら考えられる堰構築の基本工 程であるが、必ずしも現況と は一致していない。これは堰 には数回の修復, 補修が行な われたであろうし, また流失 したことを前提としたためで ある。特に堰構築の目的が水 位上昇による分水溝への取水 であるからには, 本遺跡で分 水溝と考えた第2・5号溝の 溝底レベルと無関係ではあり えない。また分水溝の掘削と 堰構築との前後関係について は、いまは同時に計画され作 業が行なわれたものと理解し ておきたい。

分水溝

大溝の第2号堰に対する分水溝として、第2・4・6号の各溝を考えた。各溝の取水口と推定される位置は挿図4に矢印で示したが、第2号溝は全長約45m、幅は約2.5mある。溝の断面は逆台形で、IV区で杭が打ち込まれている外は護岸用の杭列は見られない。溝底のレベルは取水口が4.207m、IV区での第1号堰付近で4.796mで両端差は約60cmで下流と考えた方が高くなっている。取水口が大溝に接し特に低くなっていることもあるが、V区の両端部でも北側が約21cm高くなっている。同じことは第5号溝についても言える。第5号溝の取水口はVII区に推定したが、取水口のレベルは4.620m、IV区での北端部のレベルは4.935mで両端の差は約31cmを測り、北側が高くなっている。第5号溝より別れている第6号溝はわずかに北側が低い。第5・6号溝とも護岸用杭列はなく、また第2号溝において溝に杭を打ち込み流水を調整した

ような施設はない。第4号溝 は大溝の堰に接近して取水口 があるもので, 取水口が北側 より高い。第4号溝の東岸に は護岸用の杭列が見られる。 溝の肩は長さ約10mで両岸と も不明瞭となっているが,第 4号溝の杭列は、I~Ⅲ区の 第1号溝の杭列に繋がってい る。このように分水溝と考え た第2・5号溝は、溝底レベ ルのみからすれば, 水は逆流 し大溝に注ぎこむことになる。 そこで大溝に構築された第2 号堰の高さが問題となる。第 2号堰の現況の高さは横木が 約4.40mあり,この高さまで 水位が上がっても第2号溝の 取水口が冠水はするものの第 2・4・5号溝のいずれの溝 にも水は流れこまないことに なる。しかし大溝の水位が5



31 第2・3・4号溝土器出土状況(南西から)

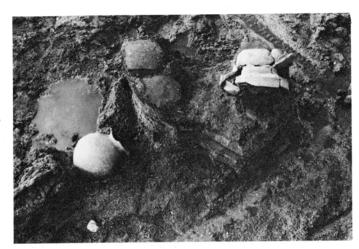


32 第 4 号溝木器出土状況

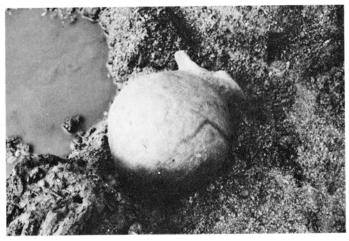
mにまで達すれば、溝底レベルとは無関係に短時間における多くの水量は望めないものの各溝 にある程度の水量を供給できることになる。第2号堰に水位5mまで揚水できる機能があった であろうか。第2号堰の検出時の状況からすれば横木の押えとして堰背面に斜杭を考え、また 堰西側に水平に並ぶ杭は、構築時には垂直に近い角度で打ち込まれていたと推測した。いまこ れらの推測が妥当とすれば第2号堰は水位5mまで揚水できる能力を持っているということが できる。またVI区の土層で大溝の最終的な流れは西岸に片寄っているがこの部分での両岸のレ ベルは約 5.2mを測り、この高さまで水が流れていた可能性が充分に考えられよう。このよう に付帯条件つきであるが各溝が分水溝として充分に機能しうるということになれば、その対象 となる耕地であるが、原深町遺跡の発掘区内では明確にしえなかった。第5号溝はⅣ区で西に 屈曲して方向を変えており、発掘区の西側に耕地を求められよう。第2号溝は大溝からの分水

溝ではあるが、Ⅳ区では第1 号堰や, 溝中の杭群で流水を 調整しているが、第3・4号 溝ともに最終的には第1号溝 に流れこむようになっており, 第1号溝に注ぐ前段階の調整 溝としての性格が強いのでは ないかと考えられる。したが って第1号溝も大溝の分水溝 であり,大溝は現在の稲塚川 と並行に北に延びていくもの と思われ、大溝は稲塚川の旧 河道の可能性が大きい。

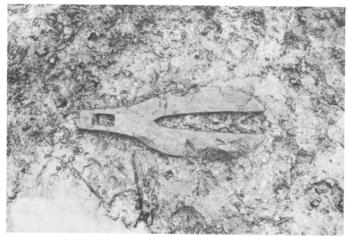
第2~6号溝より出土する 遺物は,種子などの自然遺物 は皆無で常時水の流れがあっ たとは考え難い。一方, 土器, 石器などの文化遺物は多量で やや磨耗したものが多いが. 発掘区に接近して生活跡があ ったことを物語っている。土 器は夜臼式土器, 弥生式土器,



33 大溝土器出土状況



34 大溝土器出土状況



35 大溝木器出土状況



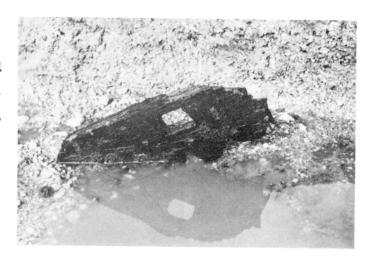
36 大溝木器出土状況

▶ 37 第 7 号溝木器出土状況

挿図37はえぶりの出土状況で、えぶりは、溝底の砂層に歯の部分が埋もれており、他の木器の出土状況とは異にしていた。第7号溝は分水溝とは考えられず、上流地域の分水溝より排水されたものを集めて大溝に再び導いた導水溝としての機能が考えられる。

土師式土器、須恵器などで、これらの土器は混在しており、 土器によって各溝の時期差を 決めることはできない。ただ し第2号堰の西岸から第4号 溝にかけて土器片が多量に出 土した(挿図31)。この地点 には堰が構築されており、分 水の最も重要な部分にあたっ ていることから水に対するあ る種の祭祀行為が行なわれた のではないかと想像された。

大溝からの出土遺物は、土器、石器の外に木器の出土数が多く、また種子などの自然遺物も見られ、特に瓢の出土は注目された。木器のほとんどは堰前面のV区で出土したが、完形品は少なく、流れついた状況を示していた。



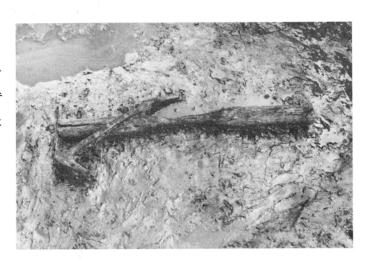
▶ 38 大溝木器出土状況

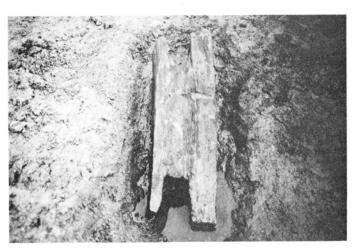
W7の出土状況で、出土位置はV区。大溝西岸の護岸用杭列下より出土した。この護岸用杭列がいつ打ち込まれたかわからないが、大溝より出土する外の遺物とは時期的な違いを認めるべきかもしれない。



▶ 39 大溝木器出土状況

▼区の大溝中央部より重なって出土した杵(W16)と手斧の柄(W9)である。杵は流れと直交しており、ともに腐蝕で一部欠損しているがほぼ完形品といえる。





◀40 大溝木器出土状況

V区堰の前面で出土したW30で、大溝の溝底に約½が埋 もれていた。原深町遺跡で出 土した建築部材と考えられる 木器は、第2号堰の構築材と して用いられているものが多



41 V・VI・VI区全景(東から)

III 遺 物



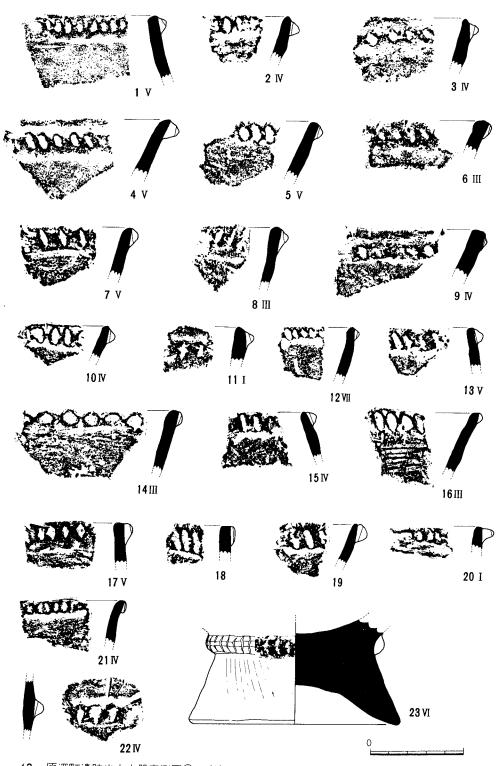
Ⅳ区の臼を出土した地点を後にした記念撮影

Ⅲ 遺 物

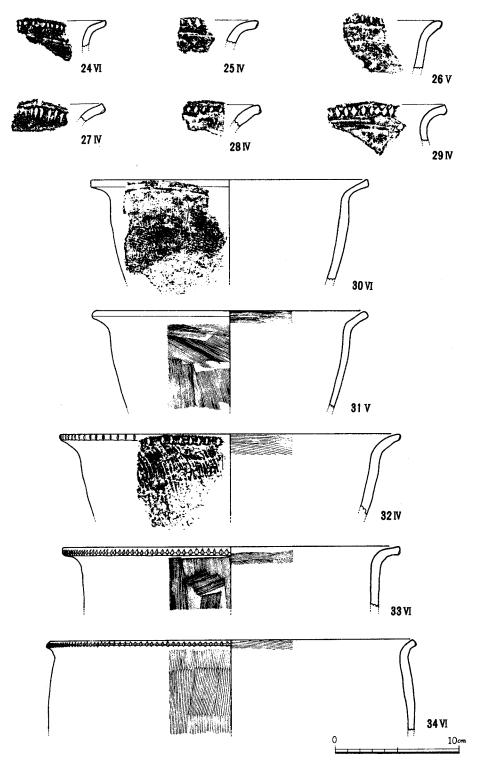
原深町遺跡の出土遺物には、土器、石器、木器などがある。これらの遺物は溝より出土したものが多く、各溝ごとに列記すべきであるが、ここでは遺構ごとではなく、大きく土器、石器木器に分けて記述した。遺物は可能なかぎり実測するように努め、石器、木器は出土数のすべてを、土器は270余点を図示することができた。このため紙数の制限から遺物個々の説明、時期等々の検討などについては記述することができず図録篇という内容となった。土器には山陰系の土器や、朝鮮半島のものと思われる赤焼土器などの外来系の土器が多く、注目される。これらの遺物個々の詳細や、考察、木器の樹種同定結果などについてはあらためて報告したい。

原深町遺跡遺構別出土遺物一覧表

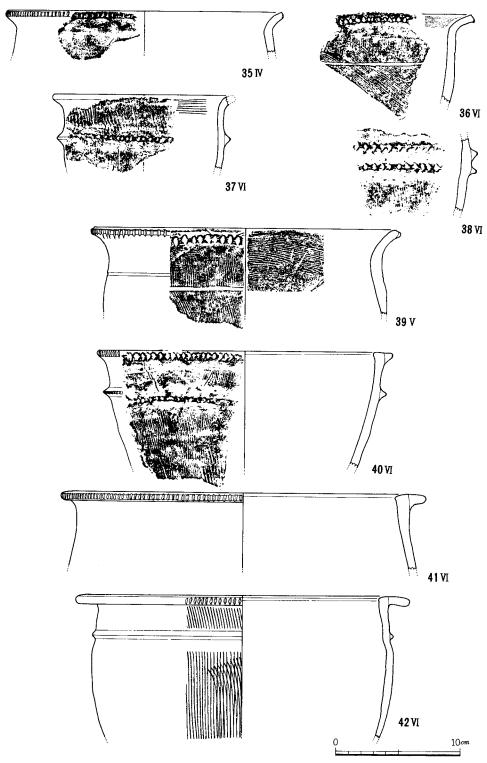
遺構	区	土器	1	石	器	木	器
1 号溝	I	214.219		103-35			
	II	90.112.123.129.131.132.137.14	4.146.166	93-1.101-3	.103-3	3	
	167.168.177.202.203.205.222.239.		39.241.	103-5.103-2	27		
		242.244.245.253.254.255					
	III 6.8.44.91.115.127.134.148.152.161.173		.161.173	95-1,3.96-1.97-1,4		20	
175.22		175.223.249		98-2.100-2	.102-3.		
				103-8.103-2	21.103-24		
				103-32			
2 号溝	III	113.175.225.226.227.248		98-5,6			
				103-2.103-1	17		
	V 82.83.84.85.86.147.151.154.155.156.15		5.156.157	94-4.99-4.99-9.100			
	159.165.172			-4.101-1.10	02 - 1.103		
				-15.103-20			
	VΙ	23.88.89.122		92-1.93-3.9			
				3.99-1.100-			
	VII			103-22.103-			
0 12 2##		00.00.101		96-2.103-28	3 		
3号溝	IV V	28.32.104					
	-	100.102.261					
4号溝	V					11	
5号溝	IV	21.213.246.264					
	V	13.26.50.128.269.272		103-18.103-	- 26		
	VI	45.252.263				-	
7号溝	VΙΙ	12.191.192.266				6.17	
大 溝	V	1.5.17.39.49.50.53.60.62.65.6				1.2.4.5.	7.8.9
		73.74.76.92.93.94.96.97.98.99				10.12.1	
		125.126.130.133.135.136.138.1				15.16.1	
		145.162.176.178.183.184.186.1				25.26.2	
		199.200.201.204.207.209.210.2				29.30.3	
		221.224.228.230.234.236.237.2	38			(N).33	
	IV	24.30.33.34.36.37.38.40.41.42					
		54.56.57.58.59.61.63.64.69.75					
		81.118.119.188.189.190.206.21	2.232.233			-	
		235	ļ				



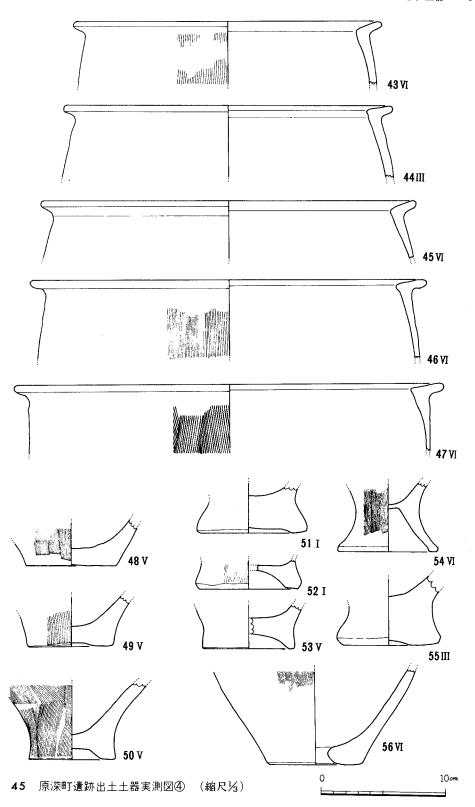
42 原深町遺跡出土土器実測図① (縮尺½)

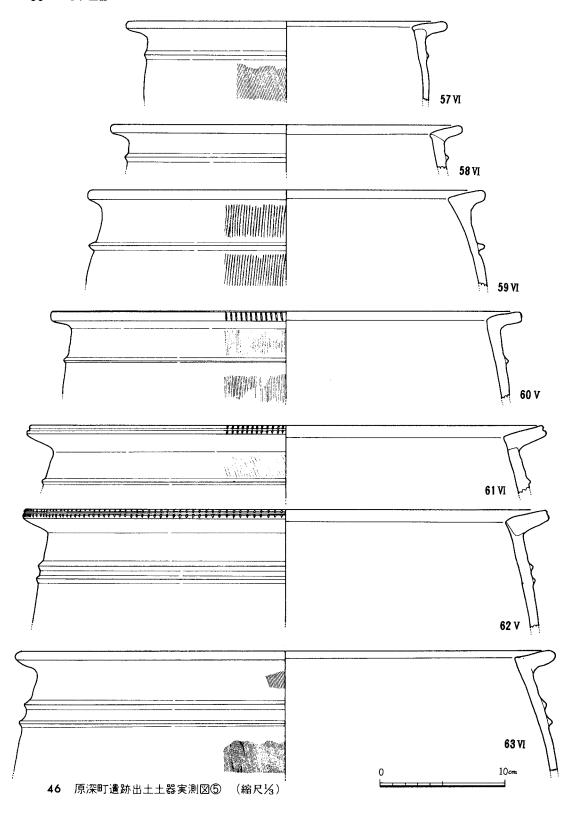


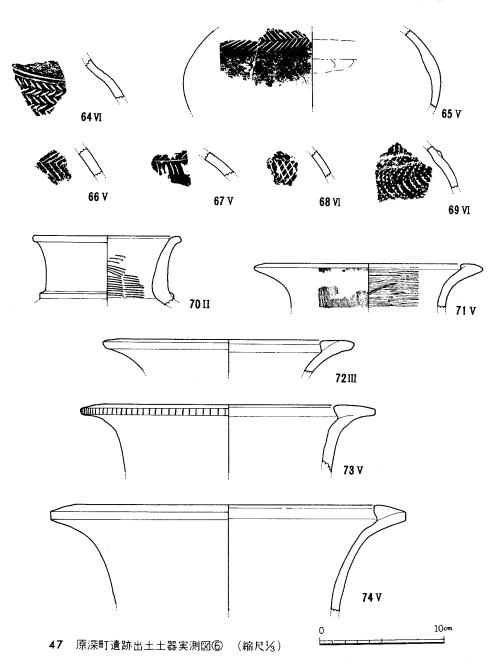
43 原深町遺跡出土土器実測図② (縮尺%)



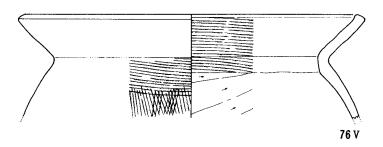
44 原深町遺跡出土土器実測図③ (縮尺⅓)

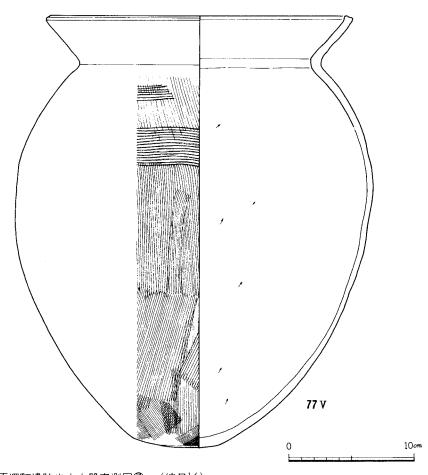




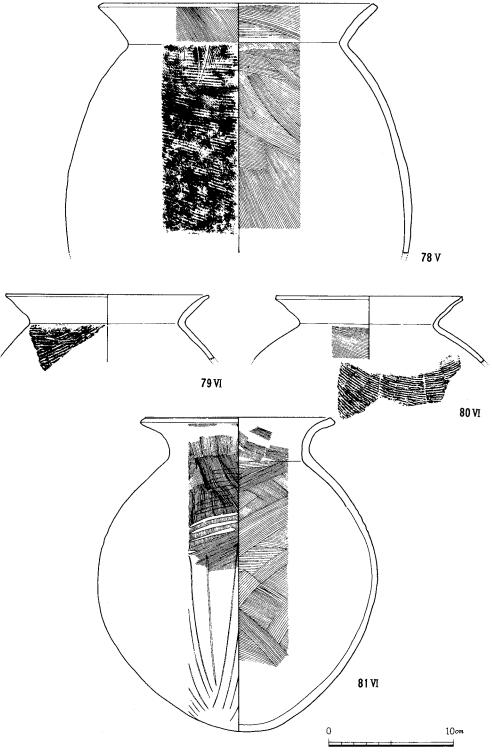




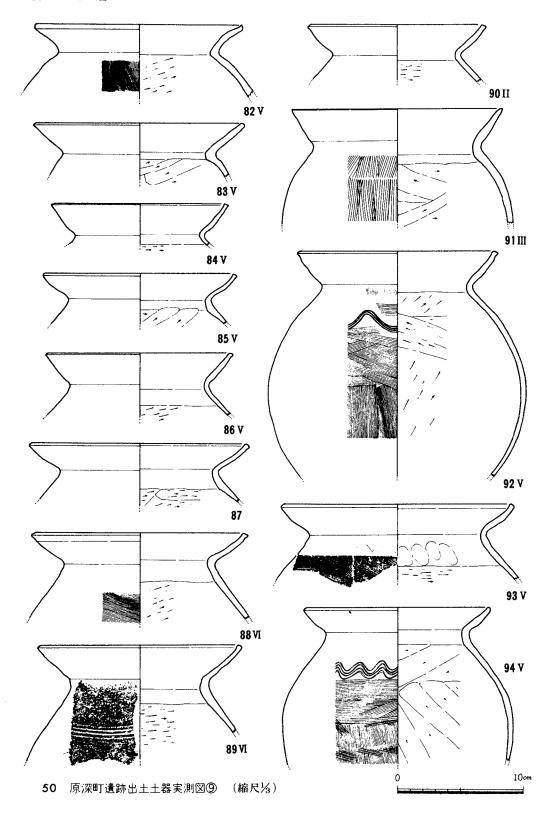


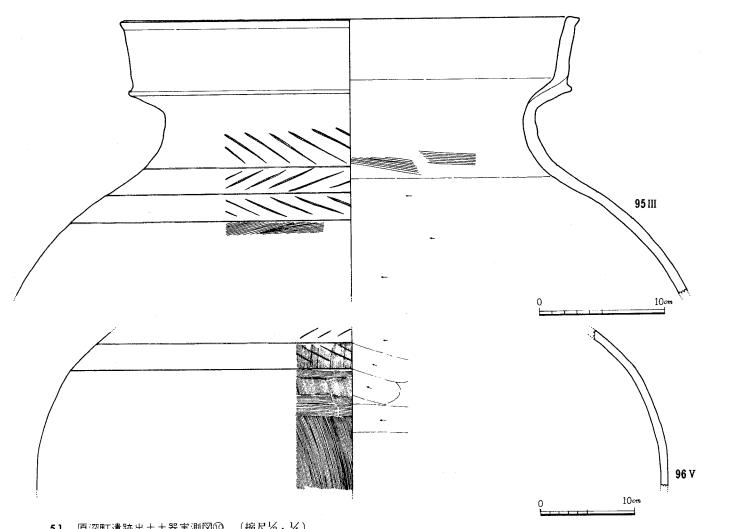


48 原深町遺跡出土土器実測図⑦ (縮尺%)

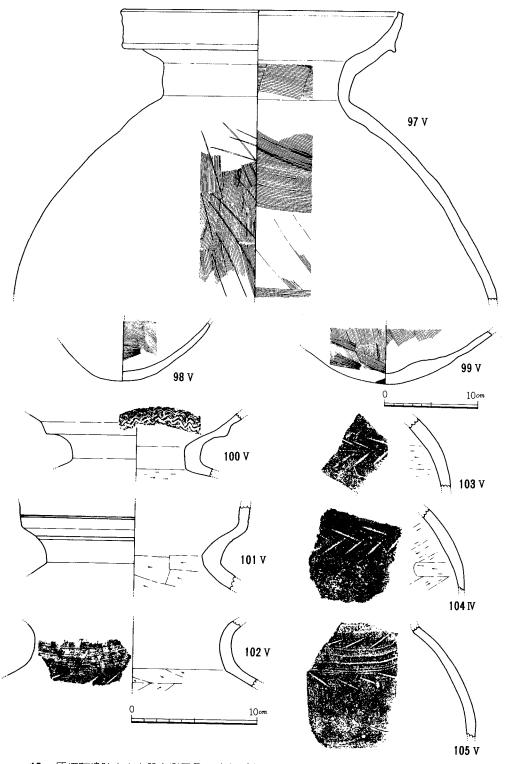


49 原深町遺跡出土土器実測図⑧ (縮尺⅓)

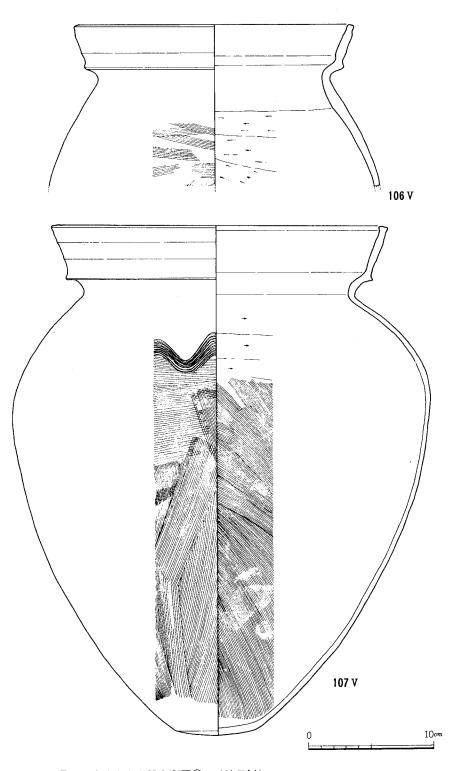




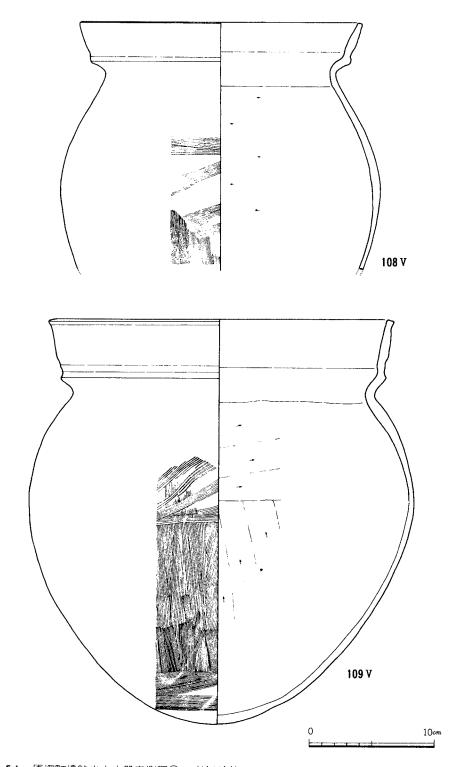
51 原深町遺跡出土土器実測図⑩ (縮尺%,%)



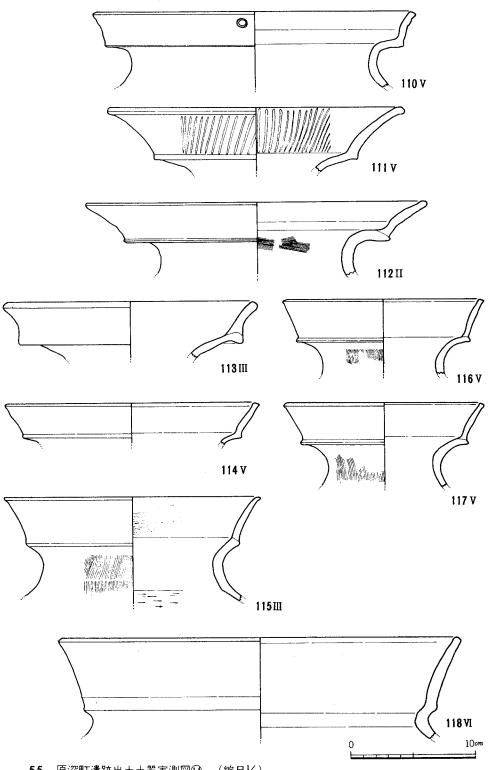
52 原深町遺跡出土土器実測図⑪ (縮尺¼,¼)



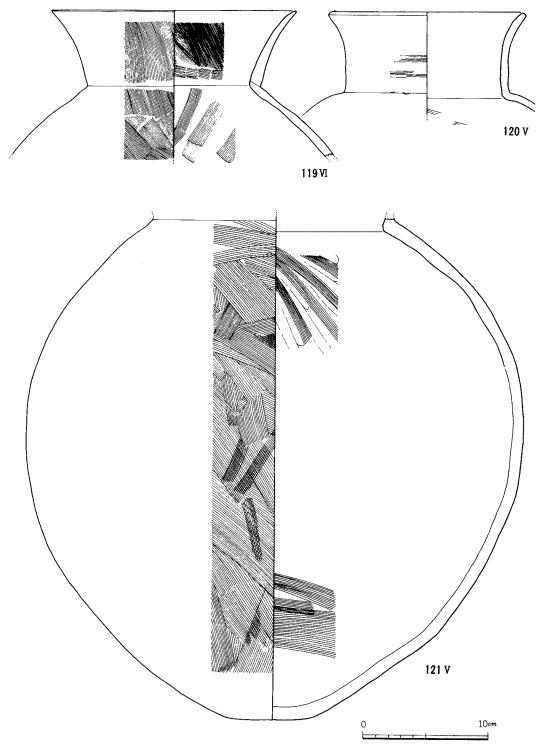
53 原深町遺跡出土土器実測図⑫ (縮尺%)



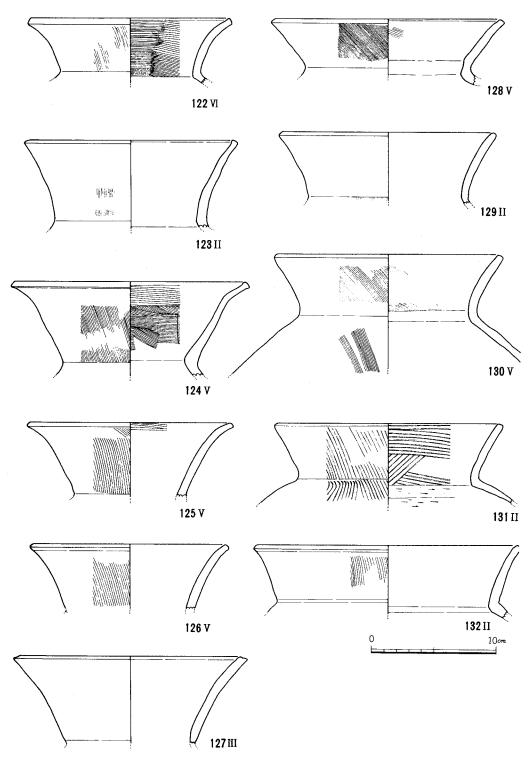
54 原深町遺跡出土土器実測図③ (縮尺%)



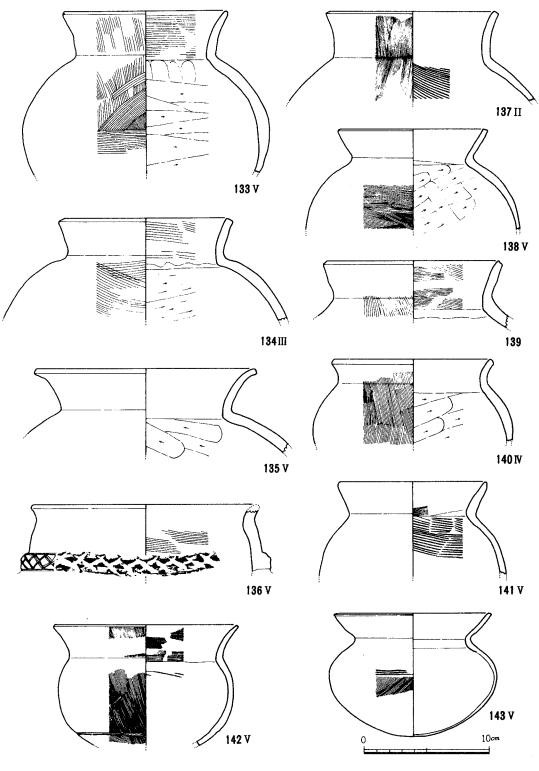
55 原深町遺跡出土土器実測図② (縮尺%)



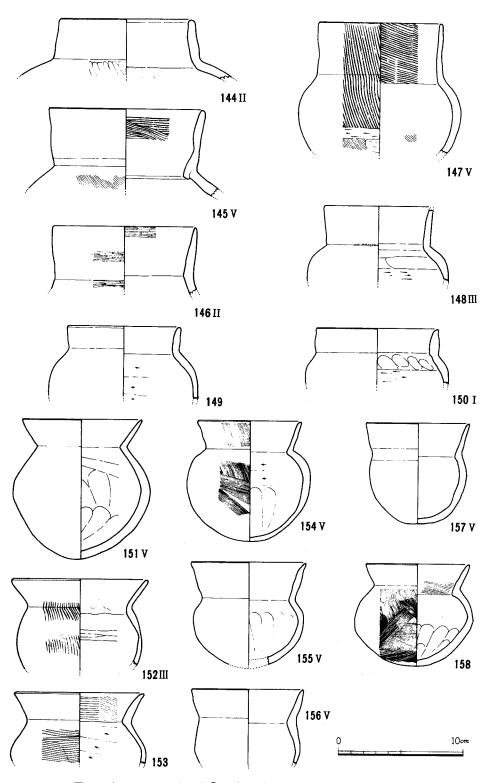
56 原深町遺跡出土土器実測図⑮ (縮尺⅓)



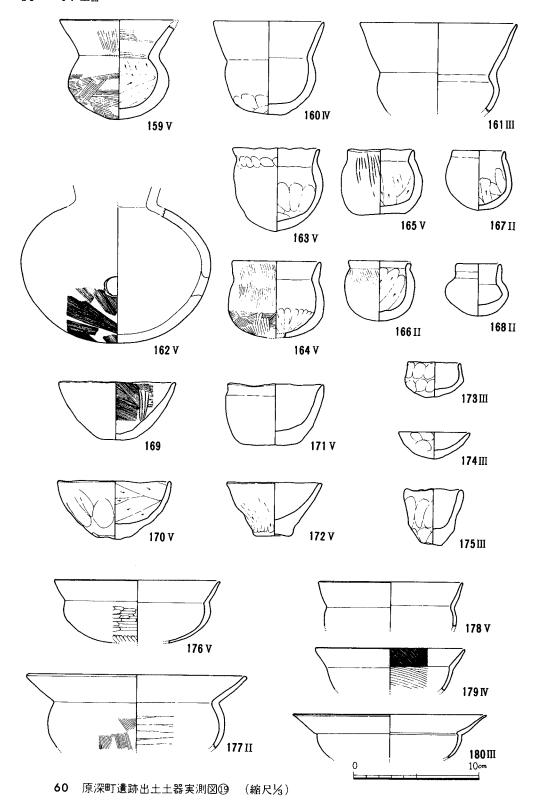
57 原深町遺跡出土土器実測図⑩ (縮尺⅓)

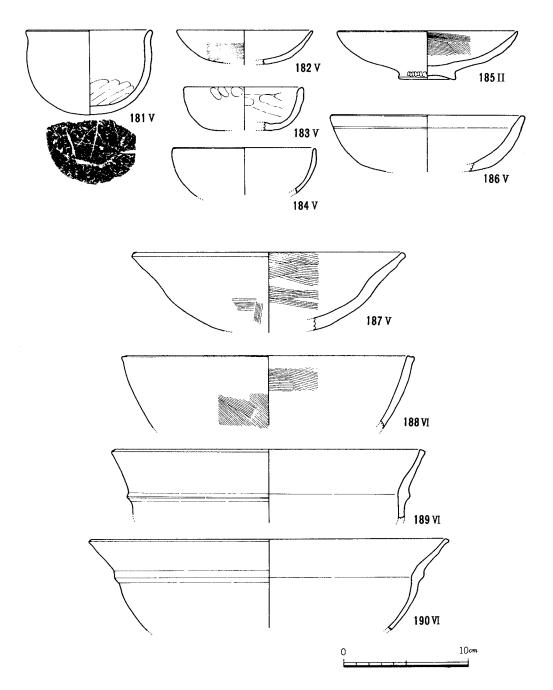


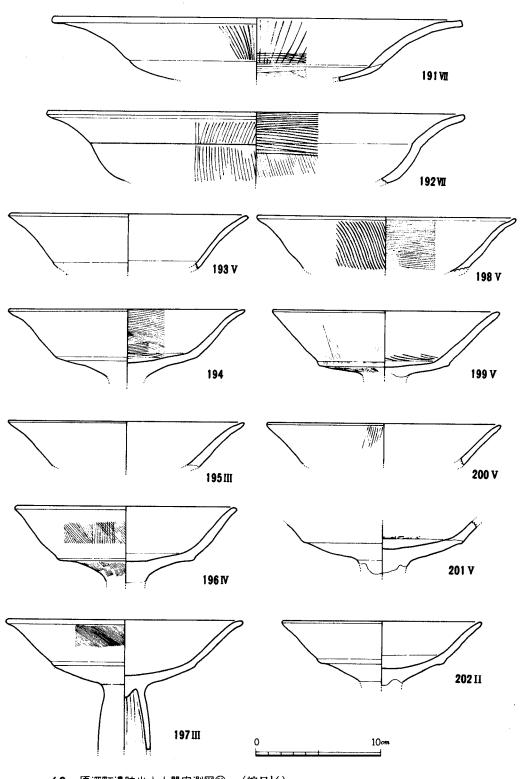
58 原深町遺跡出土土器実測図⑰ (縮尺%)



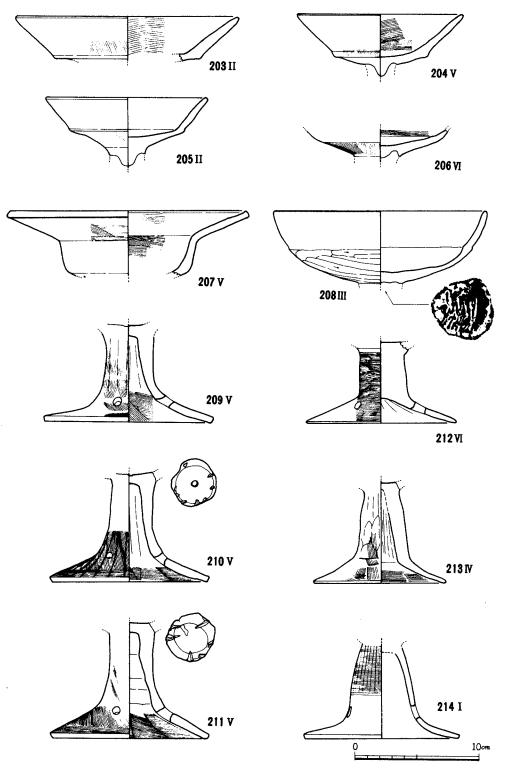
59 原深町遺跡出土土器実測図⑬ (縮尺⅓)



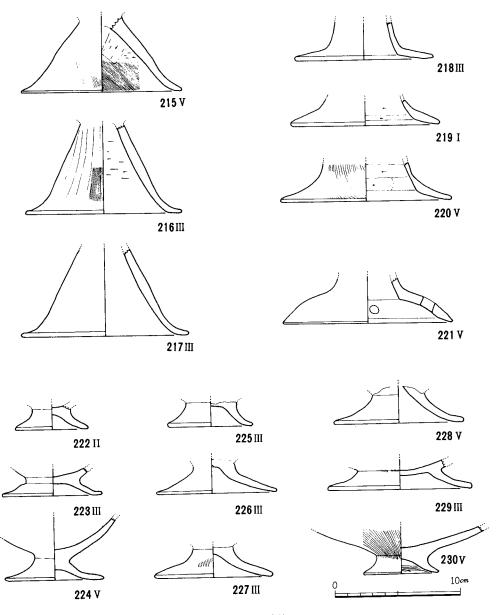




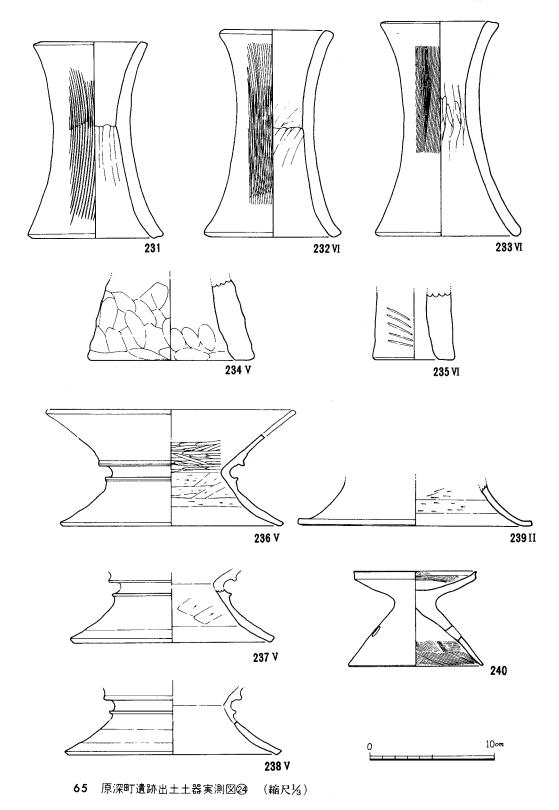
62 原深町遺跡出土土器実測図② (縮尺%)



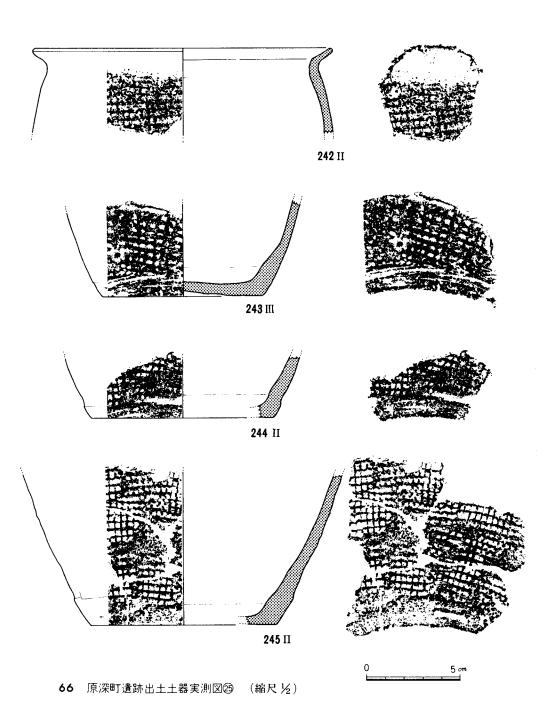
63 原深町遺跡出土土器実測図② (縮尺⅓)

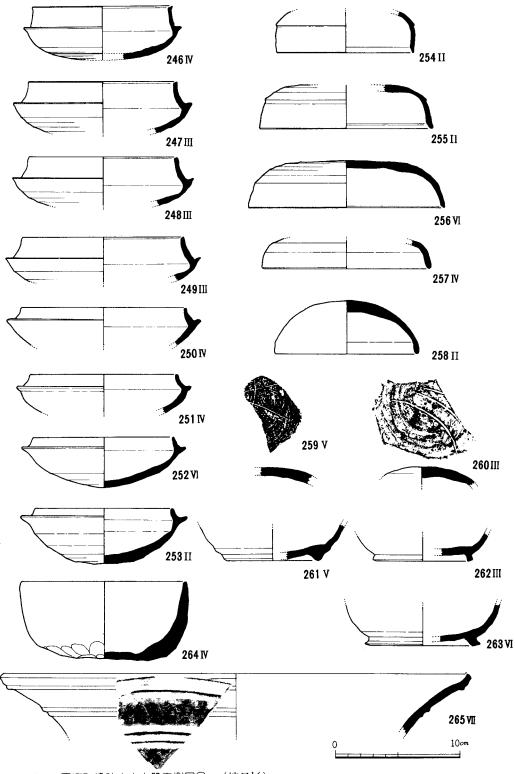


64 原深町遺跡出土土器実測図② (縮尺%)

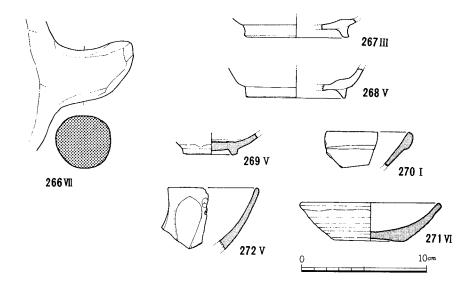




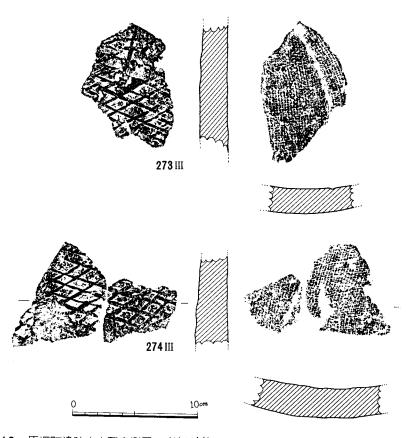




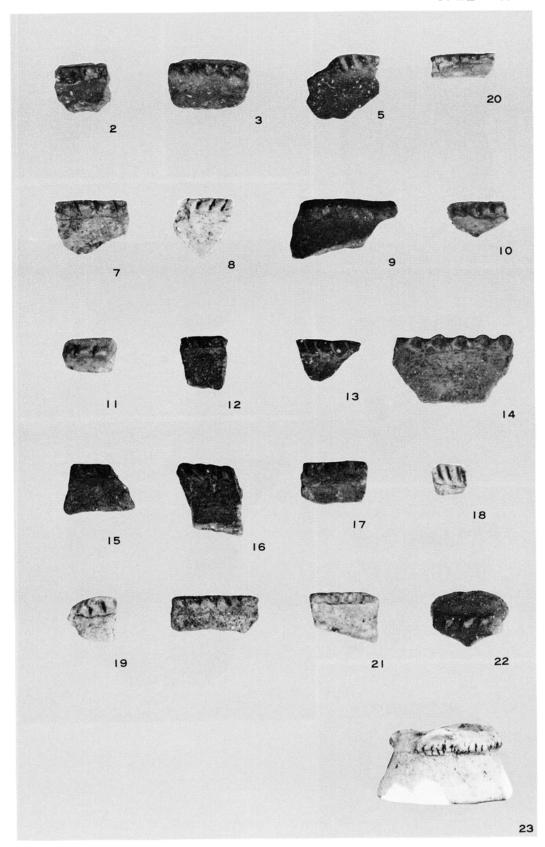
67 原深町遺跡出土土器実測図図 (縮尺%)



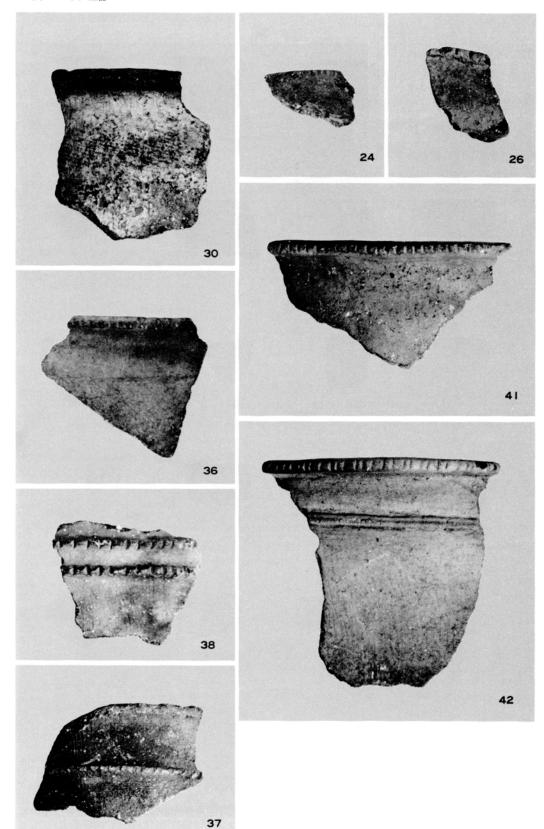
68 原深町遺跡出土土器実測図② (縮尺⅓)



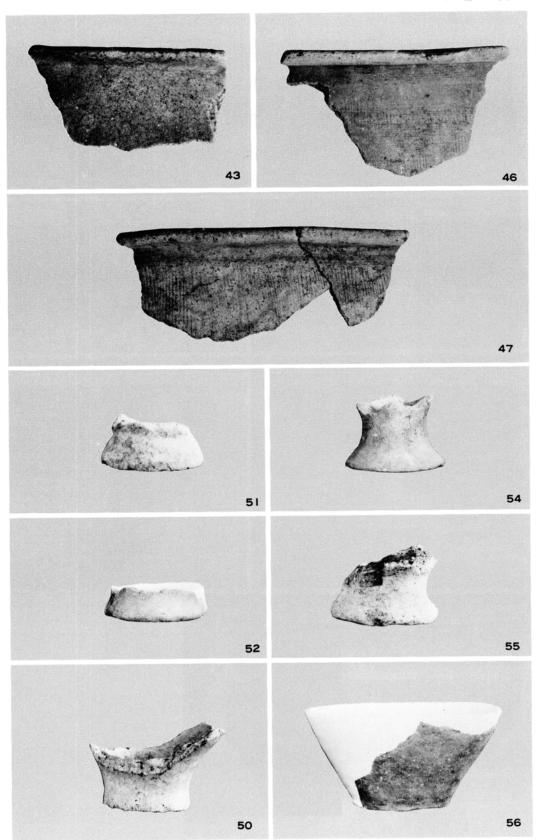
69 原深町遺跡出土瓦実測図 (縮尺%)



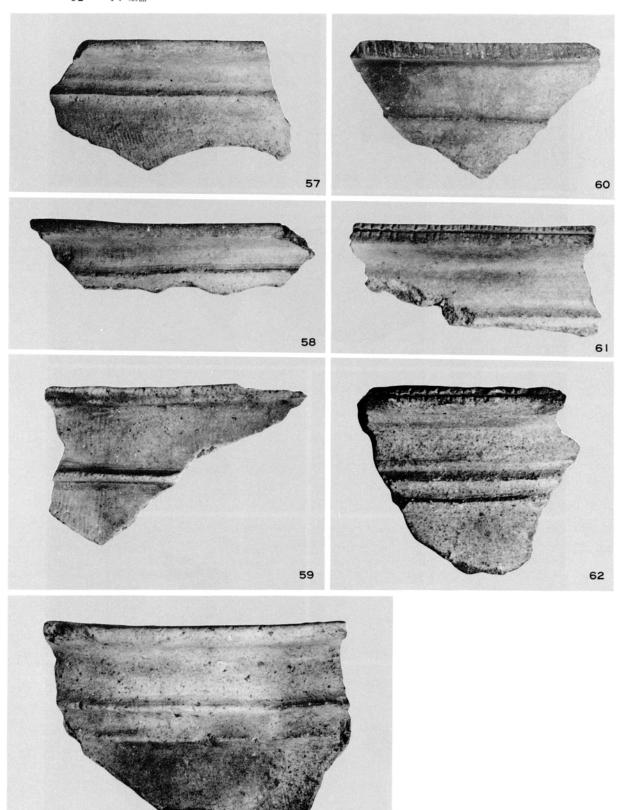
70 原深町遺跡出土土器① (縮尺⅓)



71 原深町遺跡出土土器② (縮尺%)

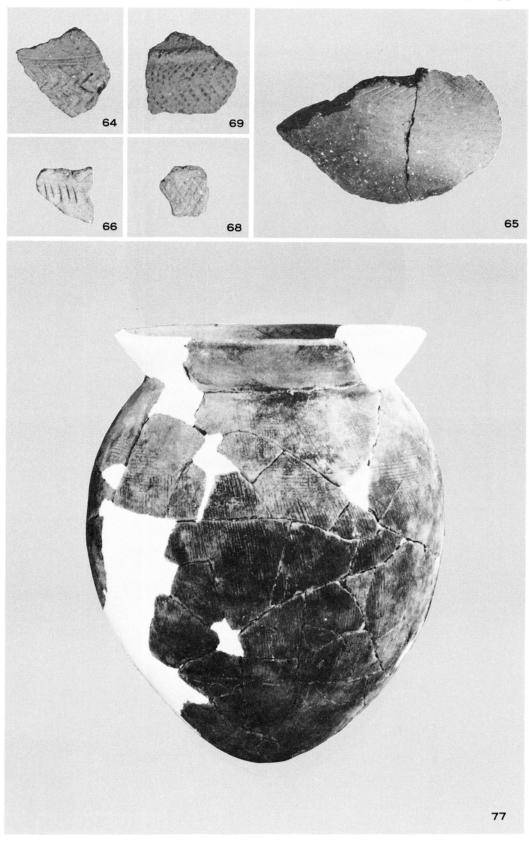


72 原深町遺跡出土土器③ (縮尺%)



63

73 原深町遺跡出土土器④ (縮尺%)

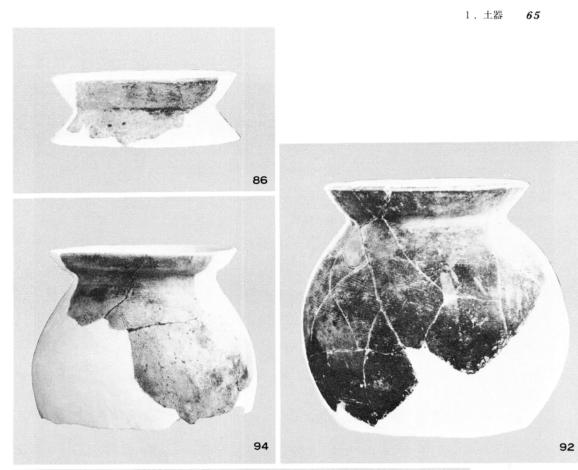


74 原深町遺跡出土土器⑤ (縮尺%)



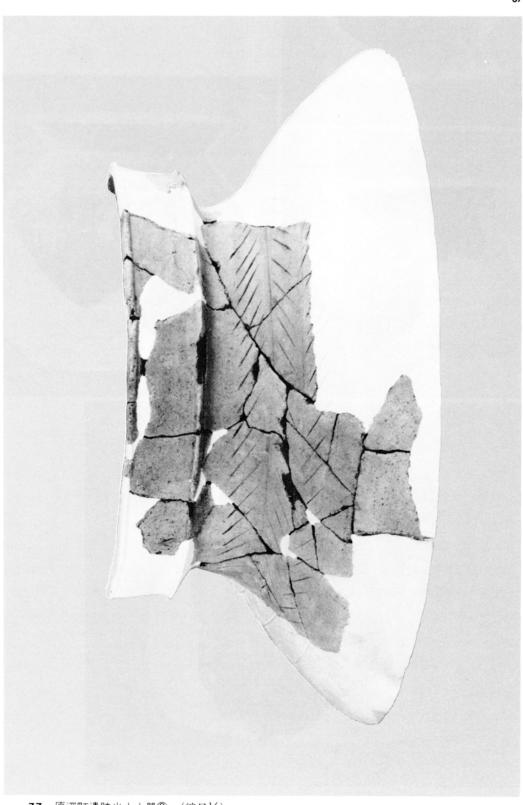


75 原深町遺跡出土土器⑥ (縮尺%)

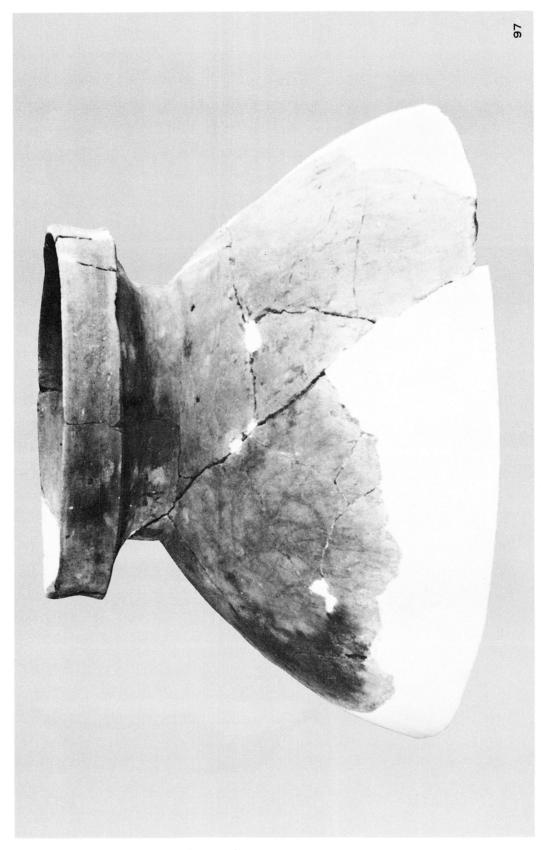




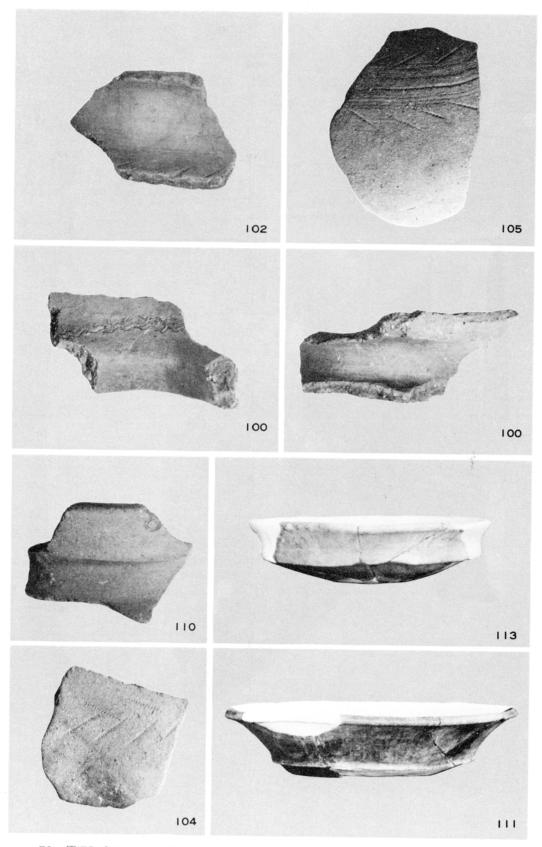
76 原深町遺跡出土土器⑦ (縮尺%)



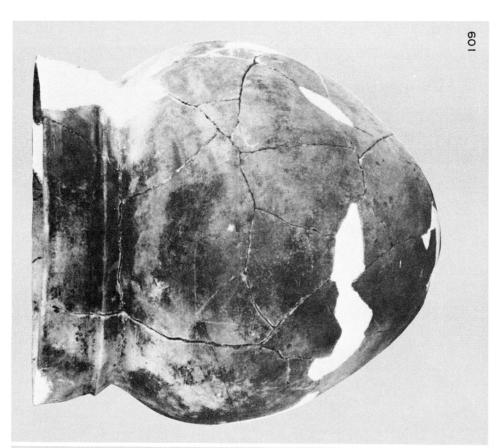
77 原深町遺跡出土土器⑧ (縮尺%)

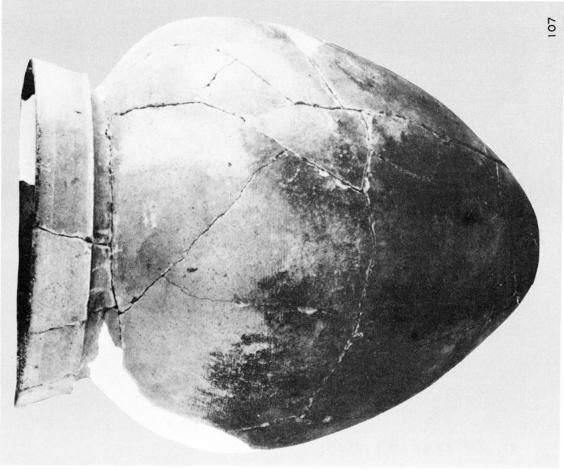


78 原深町遺跡出土土器⑨ (縮尺%)



79 原深町遺跡出土土器⑩ (縮尺%)



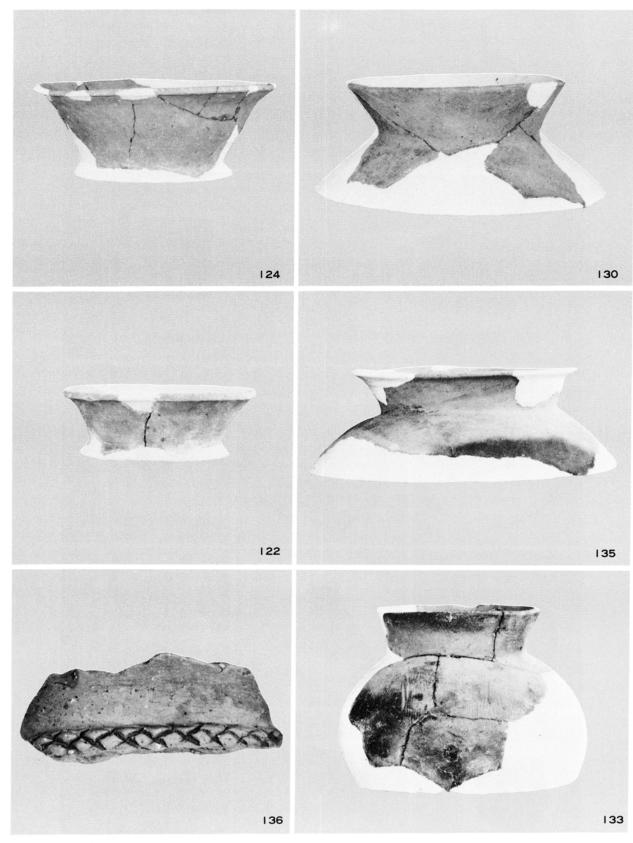


80 原深町遺跡出土土器⑪ (縮尺%)

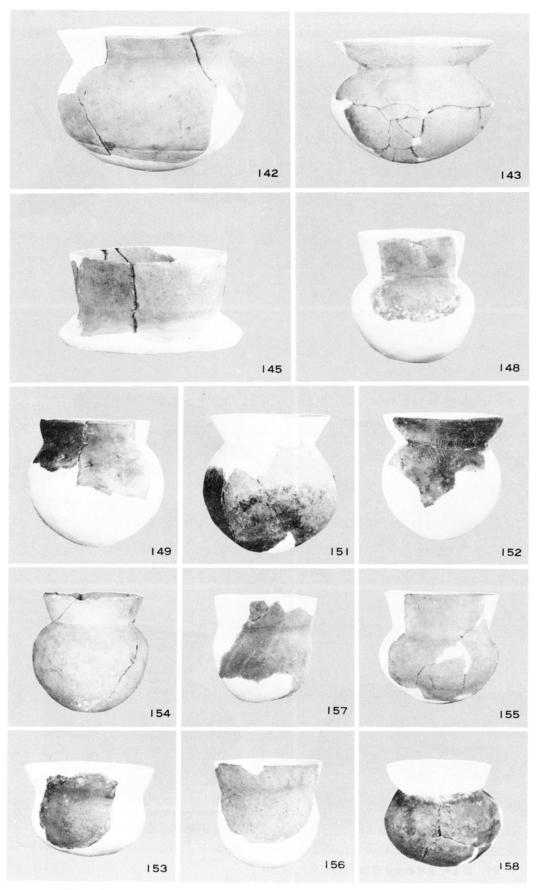




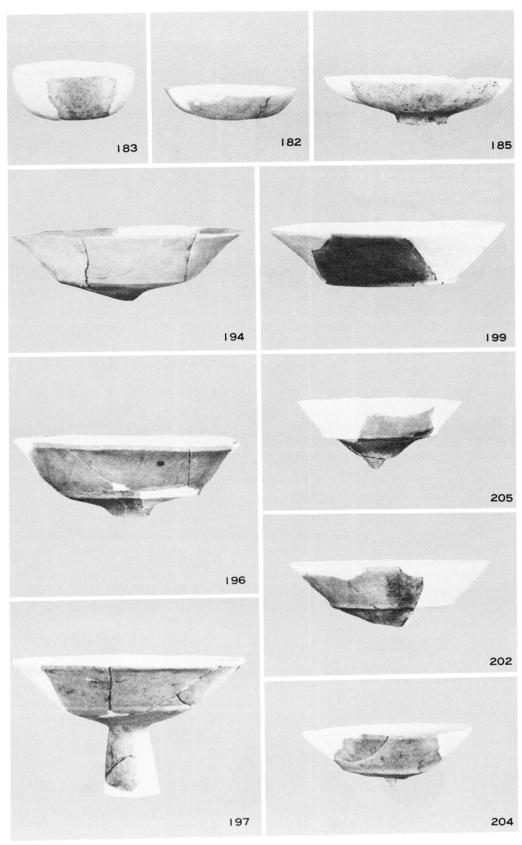
81 原深町遺跡出土土器⑫ (縮尺%)



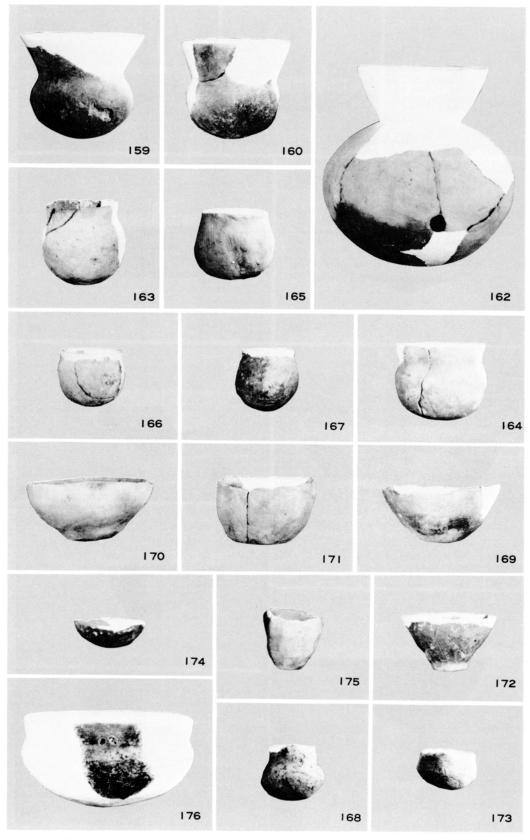
82 原深町遺跡出土土器⑬ (縮尺⅓)



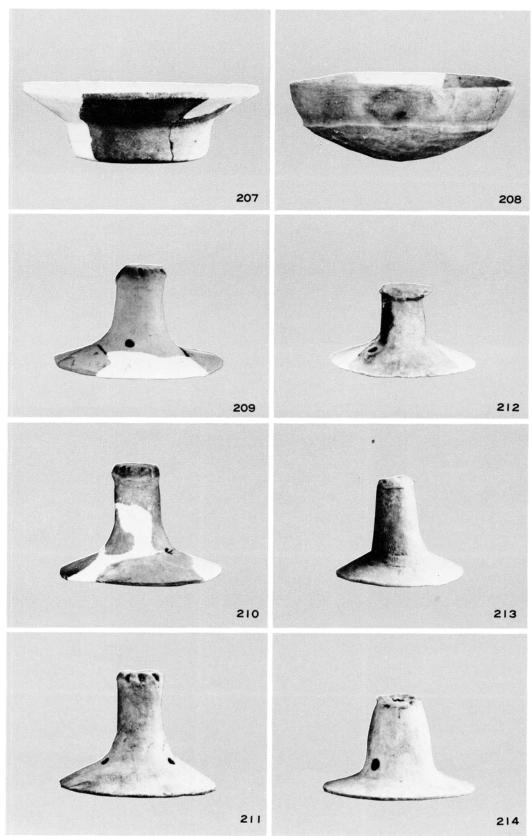
83 原深町遺跡出土土器⑭ (縮尺場)



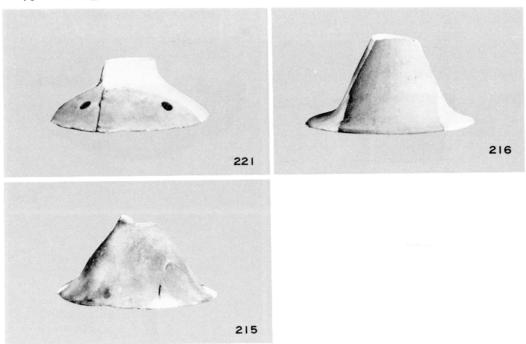
84 原深町遺跡出土土器⑮ (縮尺%)

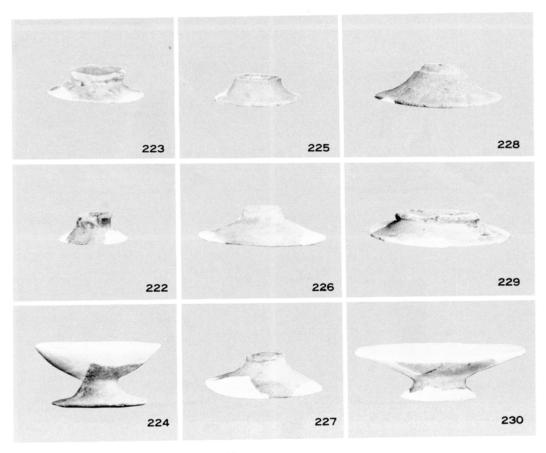


85 原深町遺跡出土土器⑮ (縮尺%)

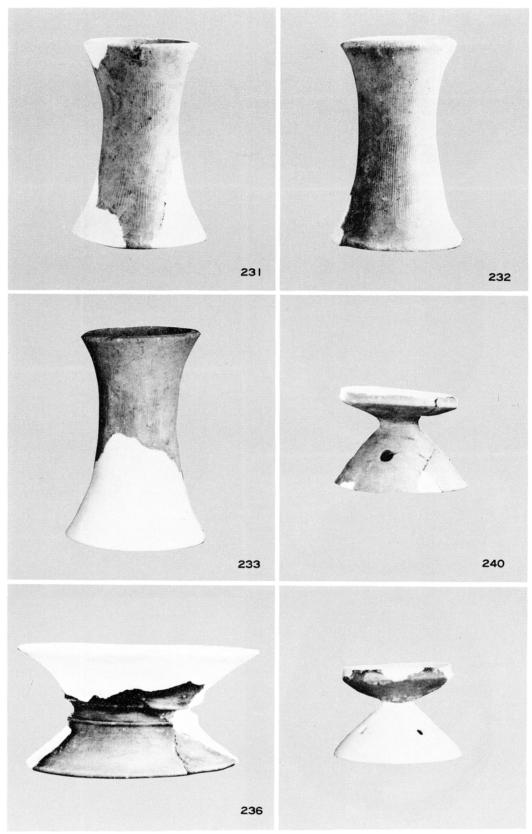


86 原深町遺跡出土土器① (縮尺%)

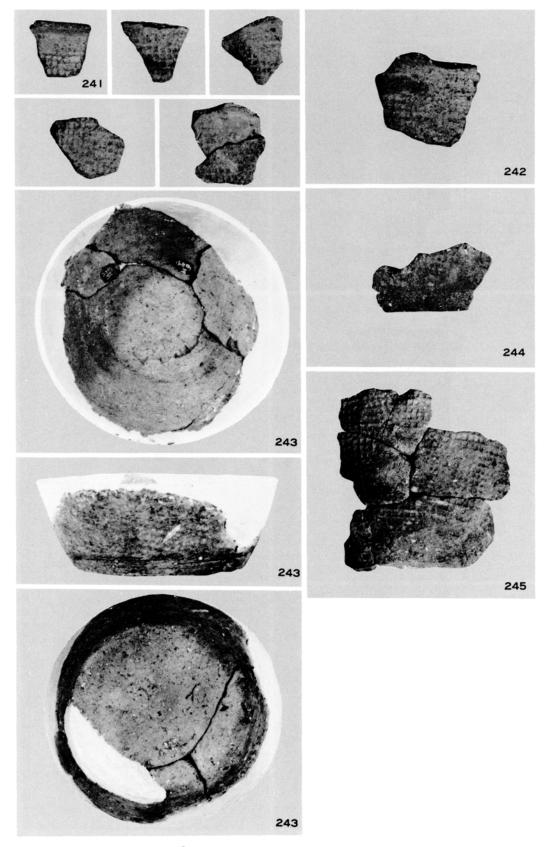




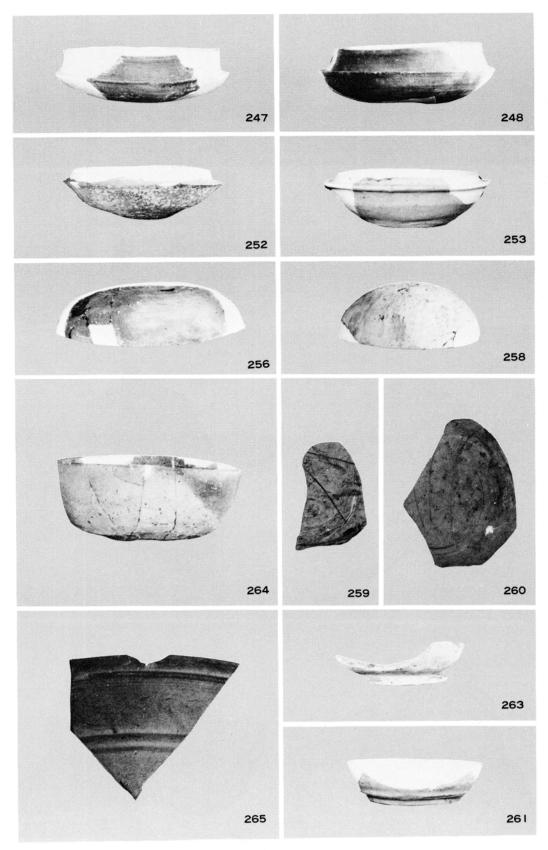
87 原深町遺跡出土土器⑱ (縮尺%)



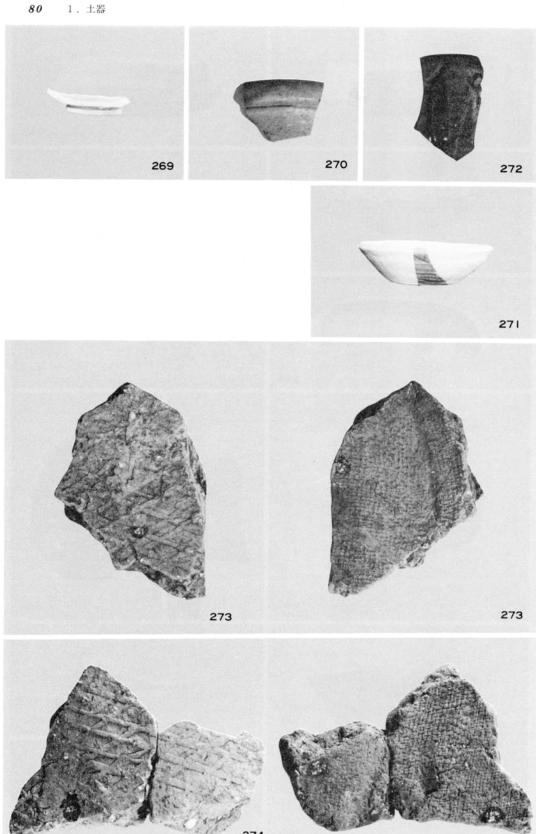
88 原深町遺跡出土土器⑲ (縮尺%)



89 原深町遺跡出土土器② (縮尺%)



90 原深町遺跡出土土器② (縮尺%)



91 原深町遺跡出土土器, 瓦② (縮尺%)

1. 土 器

原深町遺跡出土の土器は272点を図示したが、遺構ごとではなく繩文時代、弥生時代、古墳時代、歴史時代の時代ごとに分け、それぞれを器種ごとに分けた。土器の観察表は紙数の関係から別冊とし、ここでは土器の概略と各遺構の特徴的な土器、もしくは各遺構の時期を示す代表的な土器についてのみ記すことにする。またII・III区で出土した赤焼土器については北九州市立歴史博物館の小田富士雄先生と武末純一氏に朝鮮半島の類例資料をいただくなどのご指導を受けた。なお土器は通し番号とし、各末尾に出土した発掘区をつけた。

繩文, 弥生時代

第 1~21は夜臼式土器の口縁部で、23は底部である。大溝と分水溝より出土し、いずれも 磨耗した小破片である。口縁部は外傾するもの,内傾するもの,直立ぎみのものの3種があり, 外傾するものが多い。口縁部の刻目突帯には,かつて板付遺跡で森,岡崎氏が分類した(A)刻 目突帯の断面が口縁端より下がるもの(1,2,3),(B) 口縁に接して下向きの傾斜面を持 つもの(7,8),(C)口縁端と同高であり,口縁端にやや被いかぶさる感じの蒲鉾形断面の もの(15, 16, 19)などがある。焼成はよいが,胎土に1mm大の砂粒を含んでおり密ではない。 23は底部で「ハ」字形に外に開いており端部は丸くおさめる。胴部への屈曲部には粘土紐を貼 りつけ刻目を施している。24~39は弥生時代前期の甕で、口縁部はいわゆる如意形をなす。外 湾する口縁部には刻目をつけるものと,つけないもの(30, 31)があり,多くは口縁端の下側 のみにつけられている。器面の調整は口縁部内面は横ハケ,胴部外面は縦ハケで,丁寧に施さ れているものが多い。口縁部下に1条の沈線をいれたもの(36,39),断面三角形の突帯をめ ぐらし刻目をいれたもの(37)がある。40は底部から内湾しながら胴部がのび,その上端には 断面三角形の粘土を貼り付けて平坦な口縁部をつくっている。口縁部下には突帯があり,口縁 部と同じように刻目をいれている。41~47と57~63は弥生時代中期の甕である。口縁部断面は 逆「L」字形で内傾するものが多い。口径は約30cmのものが多いが,61~63のように40cmを越 す口縁を持つものもある。口縁部に刻目をいれるもの(41, 42,60~62),口縁下に突帯をめ ぐらすもの(42,58~63)があり,62,63は2条の突帯である。外面に縦ハケ目を残すものが あるが,大半は横ナデして消されている。胎土,焼成はよく,たいへん堅緻な土器である。48 ~56は底部で,平底と上げ底がある。平底のものは薄手のものが多い。上げ底の内面は指押え であり、外面はくびれている。56は平底の底部中央に焼成前の穿孔があり甑に用いられている。 壺 64~69は前期の壺肩部である。64は肩部から頸部への移行部に2条の沈線をいれ、二段 の羽状文をいれている。文様はきわめて整っている。65は扁球形の胴部をもち,外面の調整は 細かい横のミガキである。肩部には右向きの羽状文があり,沈線は見られない。66,67は左向

きの羽状文で、67は有軸羽状文である。68は斜めの格子文で右下がりの線が後につけられている。69は小さな突帯を貼り付けており、貝穀による文様は突帯の上にも施文されている。70~74は中期の壺口縁部である。71~74は広口で、口縁端内面に断面三角形の粘土を貼り付け上面に平坦面をつくっている。71の口縁部内面は細かい横のヘラミガキで、外面は縦ハケを横ナデで消している。73は口縁部外端に浅い刻目をつけている。

古墳時代

要 75~77はく字形の口縁部を持つ甕である。77は丸底に倒卵形の胴部がつくもので、胴部の最大径は28.6cmで口径より大きい。口縁部への屈曲は大きく内湾ぎみにのび端部は内側にわずかに突出している。上面はやや凹状となり、屈曲部内面はナデ上げて明瞭な稜をなさない。口縁部は内面の横ハケ目を横ナデ消し。胴部外面は底部までハケ目調整。内面は右上がりのへラ削りである。78~81は胴部に叩き痕が認められるもので、78~80は、口縁部の外反が大きく、屈曲部内面に明瞭な稜を持っている。78は第2号堰出土で外面の細かい叩き痕をハケ目で消している。81は大溝出土で口縁端は上方に突出させている。叩きは太めで胴部中位まであり下半は縦の条痕が見られる。82は叩き痕はないが口縁部の特徴は79~81に近い。82~94はく字形口縁部を持っており、口径は14~18cmを測る。口縁部が内湾ぎみにのび、端部内面がわずかに突出し、外面は強く横ナデして凹状にしているのが特徴である。胴部は中位に最大径を持ち、丸底となるのであろう。器面の調整は細かいハケ目で、内面は屈曲部のやや下からへラ削りされている。89、92~94は胴部上位に波状文をいれている。外面に煤が付着しているのが多い。

壺 95~118は二重口縁壺である。95の口径は36.8cmを測る大型壺である。口縁部はほぼ直立しており、両端とも外に小さく突出している。肩部から頸部にかけて櫛歯状の施文具で有軸羽状文をいれている。胴下半部を欠いているが、96のように球形となり、98、99のような丸底となるのであろう。96は外面の調整は細かいハケ目で内面はヘラ削りである。97は口径30.4cmを測る。95に比べ頸部がすぼまっており、胴部はやや長めの球形をなすのであろう。器壁は厚い。器面の調整は頸部内面は横ハケ、胴部外面は縦のハケ目である。100~102は二重口縁壺の頸部である。100の口縁部はないが、直立せず大きく外反しており、内面に波状文を施文している。102~105は肩部に羽状文をいれた破片である。95と同じような施文具が使われている。106~109は二重口縁の土器であるが、甕とすべきか。口縁部の立ちあがりはわずかに外傾する。口縁部下端と上端内面は小さく突出している。上面はほぼ平坦となっている。107は4mmと薄手のつくりで長い倒卵形の胴部がつく。器面の調整は口縁部が横ナデ、外面は肩部に横ハケ目後に波状文をめぐらす。胴部は縦のハケ目、内面は上¼がヘラ削りのままで下¾が細かいハケ目を施している。108、109は胴部がより丸くなっており、109は第2号堰背面より出土した(挿図30)。器面の調整は、外面がハケ目、内面はヘラ削りである。110~118は二

重口縁壺の口縁部である。 110は口縁部に竹管状の押圧文がある。 111の口縁部は大きく外湾 しており内外面とも横ナデ後に縦のヘラミガキを加えている。 112も同じように大きく外反す る口縁部で頸部が強くしまる。 115は口縁上端部が内側へ突出していずに,小さく外反してお さめており他とやや異にしている。二重口縁壺の多くは丁寧な調整が施されている。119~132 は,広口壺である。 119は外湾ぎみにのびる口縁部はそのまま先細りとなって終っている。器 面は内外面とも細かいハケ目調整である。 121は口縁部を欠くが、広口壺の胴部であろう。胴 部最大径は中位にあり40cmを測る。 122 ~ 132は端部のつくりにやや違いがあるが屈曲部内面 には稜がつく。 124は口径19.2cmで長めの口縁部は微妙に湾曲して外反し、端部を外傾させて おさめている。 133 ~ 135, 137 ~ 139の口縁部は短かく外反している。胴部は球形で,胴部 内面はヘラ削りで、外面はハケ目調整である。 136は口縁部の小破片のため全形を知りえない。 頸部に断面台形の突帯をめぐらし格子状の刻目をいれている。口縁部は内湾ぎみに直立し,端 部は小さく外反している。明茶色を呈し、内面は横ハケ目を横ナデして消している。140~161 は小型丸底壺である。 144 ~ 150は直立ぎみにのびる口縁部を持っており、 144、 145は大き めの胴部がつくもので他と区別すべきか。 143の口縁部のつくりは,84などの甕口縁部に類似 している。器壁も同じように薄く,胴部内面はへう削りで,外面はハケ目調整で類似点が多い。 小型丸底壺は口縁部の外傾度、口径と胴部径との比較などで多くの形態がある。 162は胴部中 位に直径 1.5cmの孔が焼成後に穿たれている。 163~175は手捏ね土器で, 形態は小型丸底壺 形と鉢形のものがある。 176 ~ 190は鉢である。 176 ~ 180は小型丸底壺と同じようなつくり の口縁部で大きく外に開いている。 176は口径13.2cmで, 屈曲部内面には稜を持つが丸みがあ る。体部外面は細かいヘラミガキで内面は丁寧なナデ調整を加えている。 181は体部上部でわ ずかに外反して口縁部をつくっている。底部には葉脈痕が残っている。 182~ 186は丸底の底 部から内湾ぎみに胴部がのび、そのまま丸くおさめている。 185は底部の側面を押えて脚をつ くっている。山陰地方で低脚付坏形土器と呼ばれている土器に類似しているが脚のつくりが貧 弱である。 187 ~ 190は大型の鉢で体部が中位で屈曲するもの,屈曲部に断面三角形の突帯を めぐらすもの、屈曲しないものなどがある。 191 ~ 221は高坏である。全形を知りえるものは 1例もない。 191、 192は坏部中位よりやや下で屈曲し、上半部が大きく外湾しながらのびて いる。 191は上半部の長さが下半部を凌いでいるが、 192の屈曲部は中位にある。 193~ 206 の坏部下半部はわずかに内湾ぎみに短かくのび、上半部は直線的にのびるもので、口縁部で小 さく外反するものと,しないものがある。後者には屈曲部外面が小さく突出しているのが多い。 207は畿内庄内式に見られる二段の屈曲を持つ高坏に類似している。直線的にのびる口縁部は 内外面ともにハケ目を横ナデ消しされており、口端は内面に小さく突出する。一段目屈曲の接 合部から取れている。早良平野での類例はないが、博多区那珂深ヲサ遺跡で出土している。208

は坏部中位に段があるが、下半部から屈曲せずに内湾しながらのび、下半部外面に細かいへラ削りを加えている。 209~ 221は高坏脚部で、脚筒部が円柱状をなすものと大きく開くものとがある。円柱状のものには裾部への屈曲部に 2~3か所の小孔がある。脚筒部が開くものには裾部で屈曲して大きく開くものと、屈曲部が明瞭でなく水平になり端部となるものがある。222~ 230は小型の脚部で上部形を知りえない。 230は内面に丹が塗付されており、外面は縦のハケ目調整である。 231~ 235は弥生時代の器台である。 234は内外面ともに指押えで凹凸となっている。 235は外面に叩き痕が残る。 236~ 239は鼓形器台である。 239の脚台部径は18.8 cmありやや大きい。 236~ 238は大溝出土で器受部より脚台部の径が小さい。器受部の内面は細かいヘラミガキ、脚台部はヘラ削りである。 240は皿形の受部を持つ器台である。受部口縁端は上に小さく突出している。脚部には4つの小孔が見られる。 246~ 260は須恵器の坏蓋と坏身である。須恵器はIV区に集中しており、多くは床土下の包含層より出土している。坏身のうちもっとも古い特徴を持つのは 246で、口径11.4cmを測る。

歷史時代

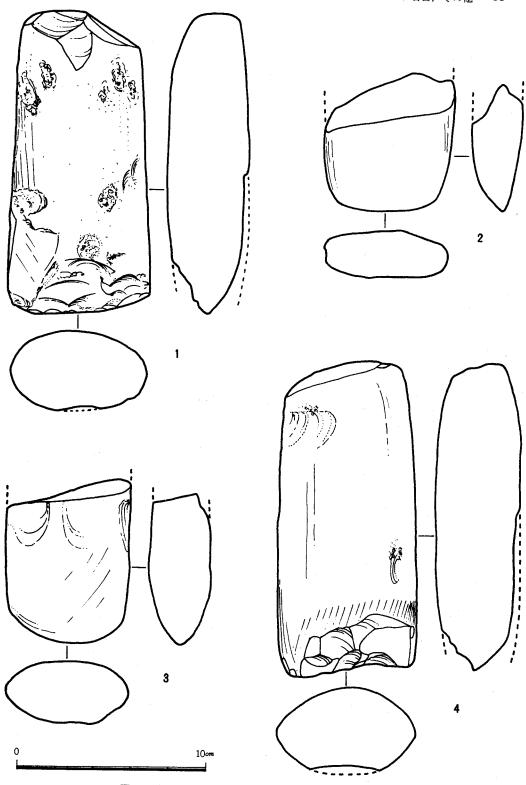
高台付坏 261~263は須恵器の高台付坏である。高台は底部端よりやや内側に貼り付けられている。高台断面形には蒲鉾形、方形の二種がある。267,268は土師器で高台の貼り付け位置は須恵器高台付坏と同じである。高台は背が低く、外に開くものと、直立するものがある。

磁器 269 ~ 271は中国製白磁の碗と皿である。 270は玉縁の口縁部で、胎土に黒色微粒子を含む。 272は鎬葉を陽刻した青磁碗である。釉色は裏葉色で、内面には細かな貫入がある。

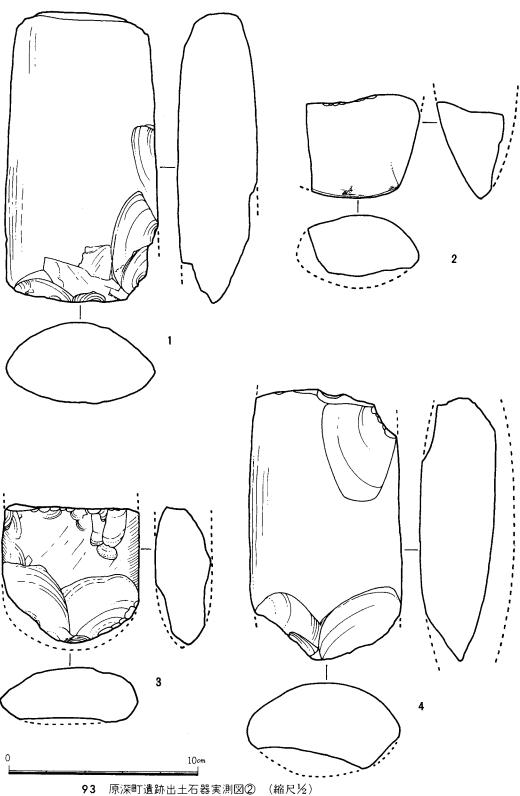
瓦 273・274はⅢ区包含層より出土した平瓦片である。いずれも斜格子目文があり、叩き板の彫りは浅い。 273の斜格子は12mm×14mm、 274は9 mm×14mmである。

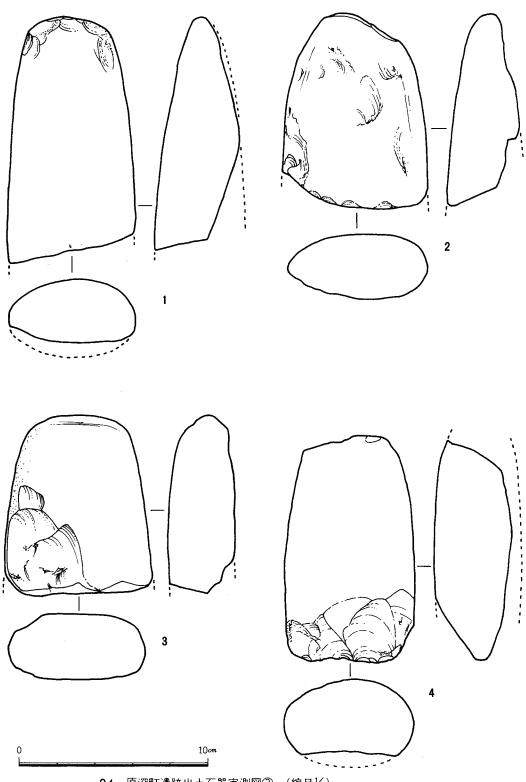
赤焼土器

241~245は格子目の叩き痕を持つ土器で、破片総数は16点である。 243の底部はⅢ区出土。他のすべてはⅢ区の第1号溝より出土している。出土個体数は、 243が底部のみ完形であることから少なくとも2個体以上であるが、図示した5点は色調、細部のつくりなどに違いがあり、5個体以上の可能性がある。底部は上げ底ぎみの平底で、胴部はゆるく外湾しながらのび、胴上部から内傾してく字形の口縁部へと続く。口縁屈曲部内面はナデ上げされ明瞭な稜はない。口縁端は丸く、口縁内面は強く横ナデされ凹状となっている。格子目叩きは頸部から底部の0.8~1.8cm上にまでつけられる。格子目の大きさは3mm×3mmの方形で部分的に長方形を呈するものがある。底部近くは時計まわりで強く横ナデ(あるいはへラ削りか)、内面も強く横ナデされて凹状となり段をつくる。胴部内面はナデ調整。胎土は小砂粒を多く含む。色調は茶褐色を呈するものが多く、 243は灰茶色である。すべて小破片のため全形を知りえなかったが、 242の口径は16cm、 245の底径は10cmあり、器高はこれまでの出土例から推定して15cm前後あったものと思われる。



92 原深町遺跡出土石器実測図① (縮尺½)

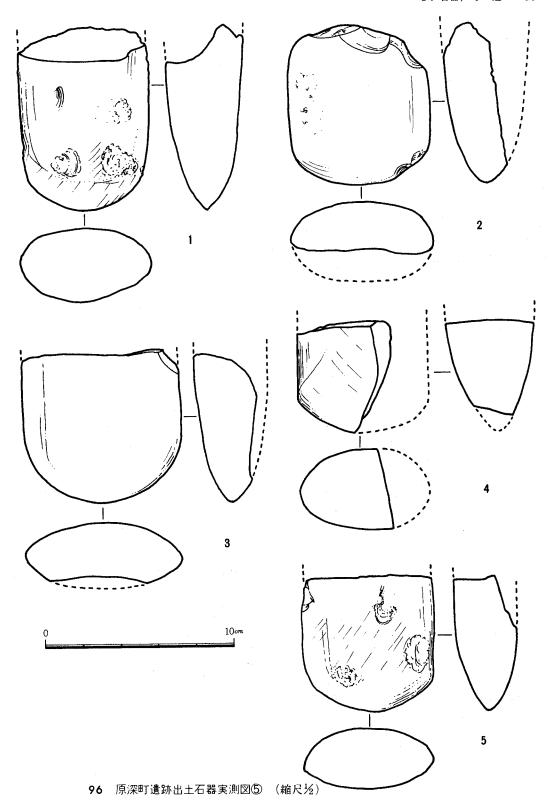


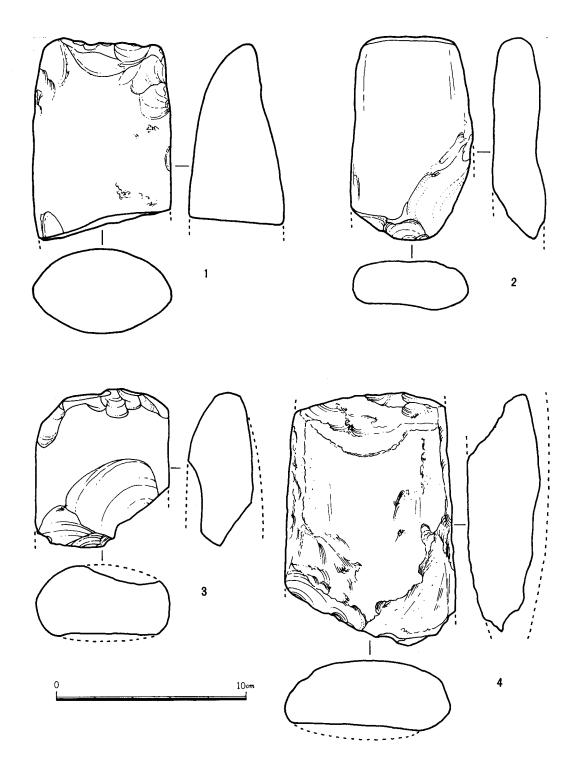


94 原深町遺跡出土石器実測図③ (縮尺½)

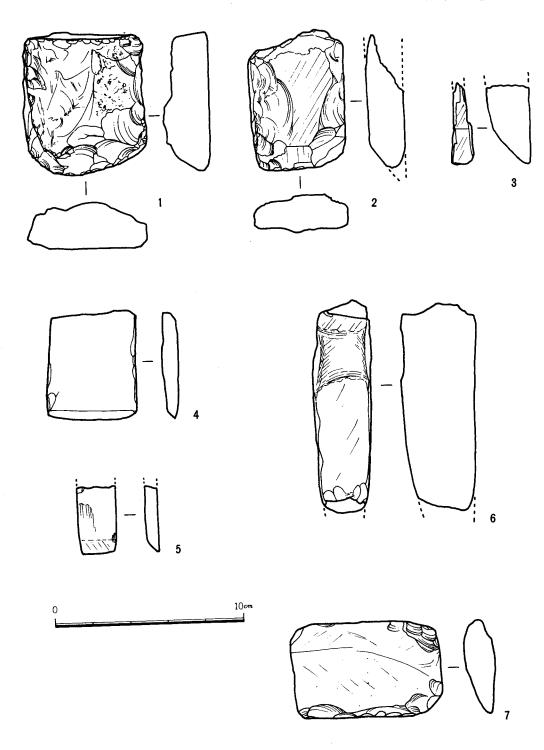
95 原深町遺跡出土石器実測図④ (縮尺½)

10cm

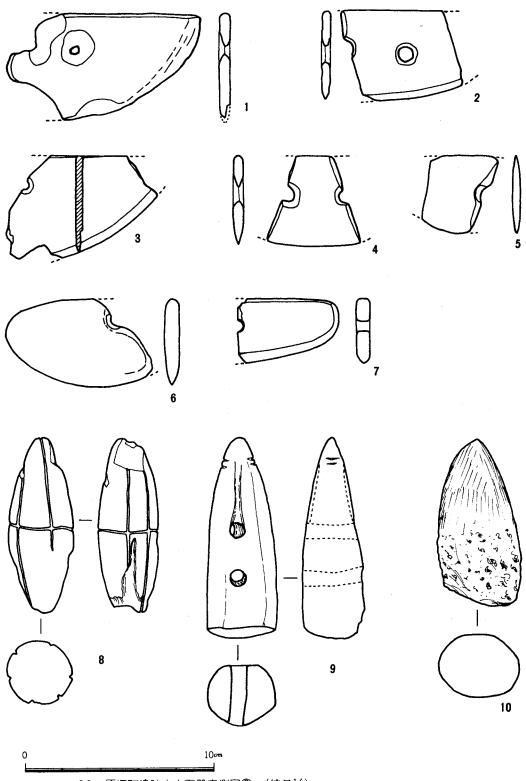




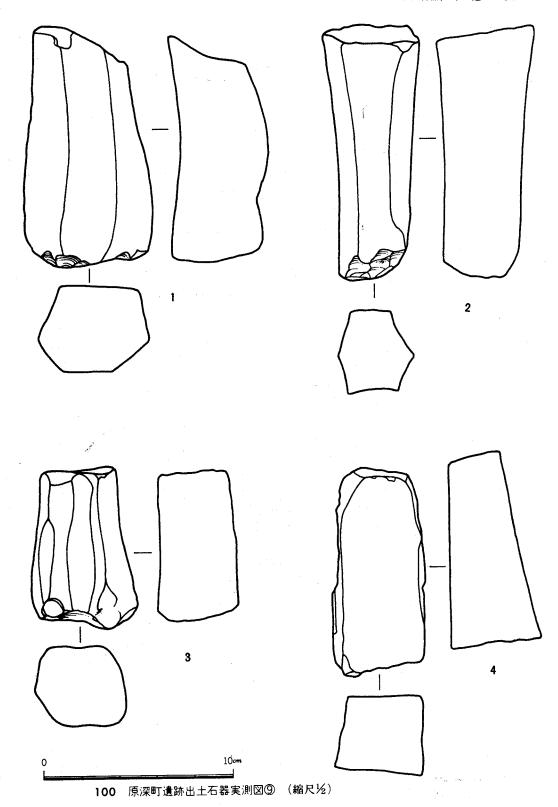
97 原深町遺跡出土石器実測図⑥ (縮尺½)

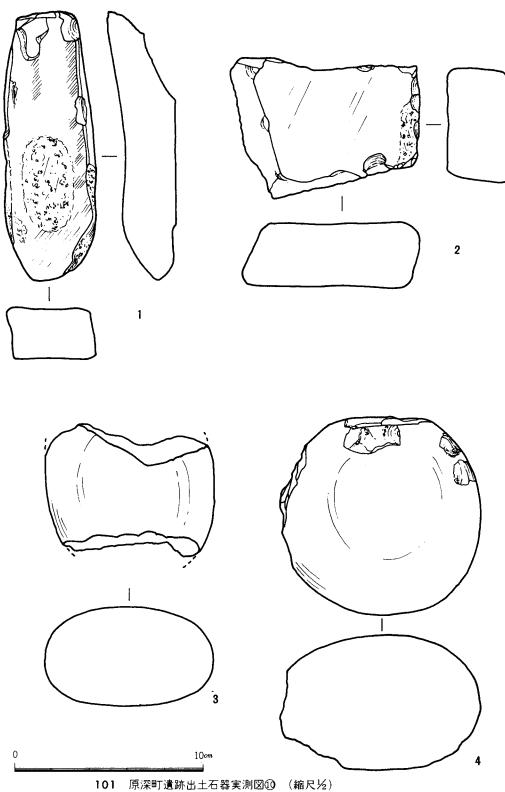


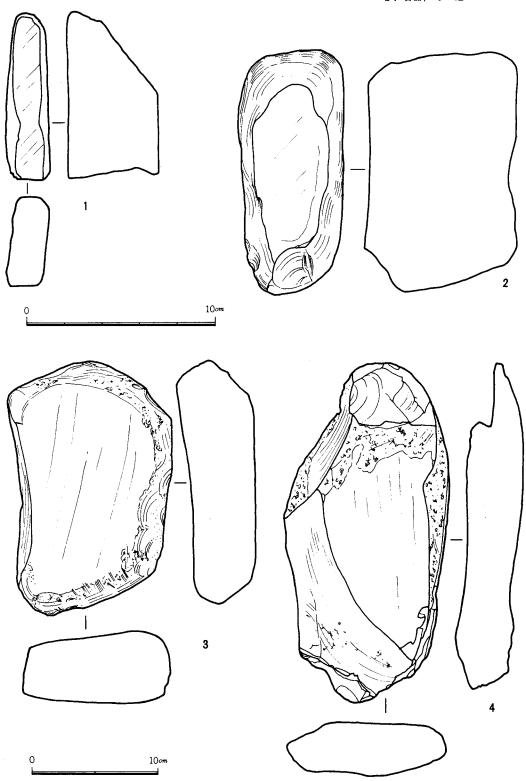
98 原深町遺跡出土石器実測図⑦ (縮尺½)



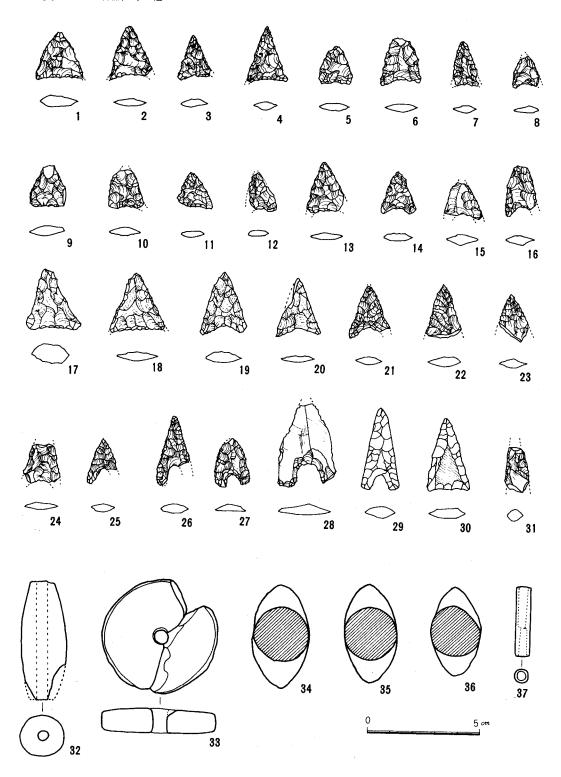
99 原深町遺跡出土石器実測図⑧ (縮尺½)



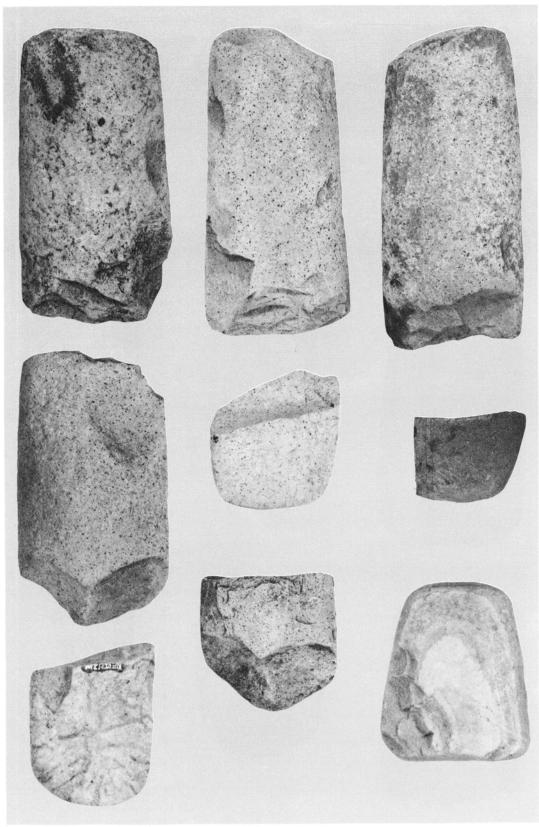




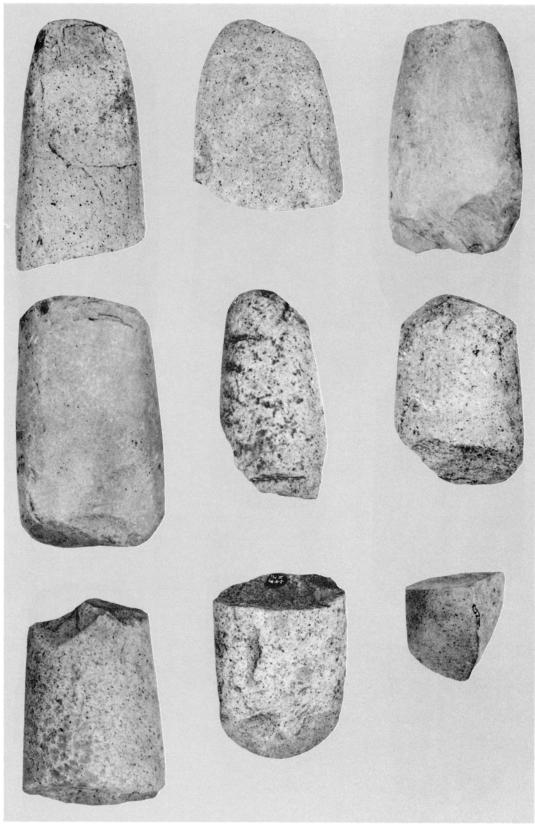
102 原深町遺跡出土石器実測図⑪ (縮尺½, %)



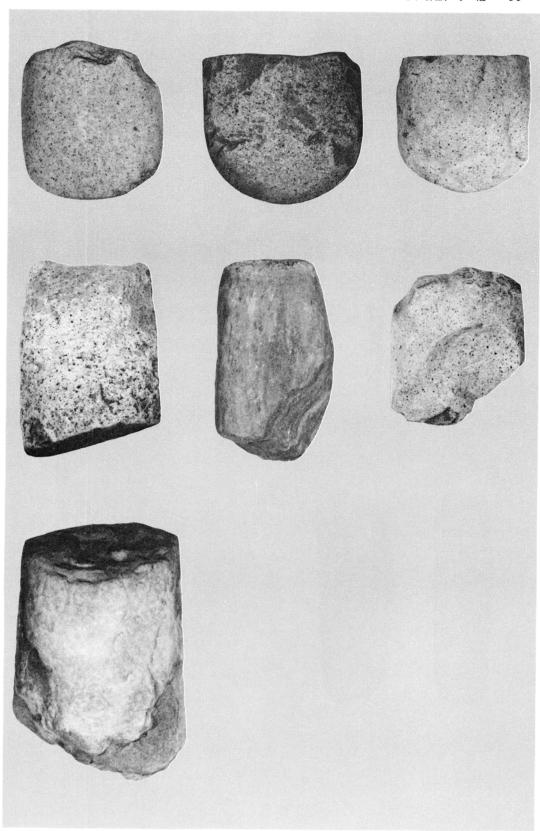
103 原深町遺跡出土石器その他実測図 (縮尺%)



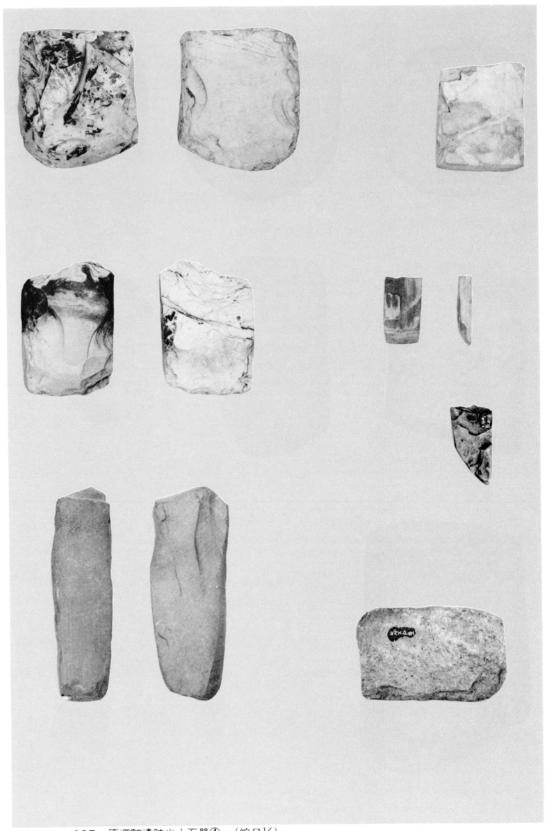
104 原深町遺跡出土石器① (縮尺%)



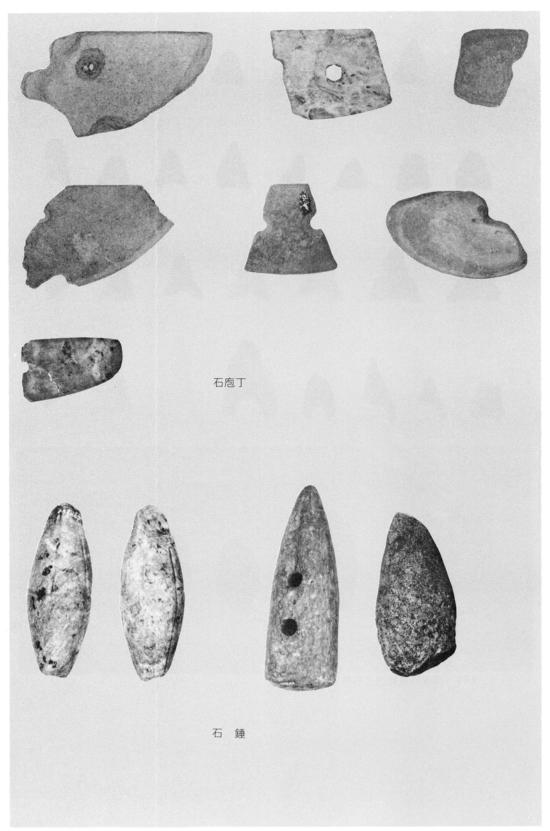
105 原深町遺跡出土石器② (縮尺½)



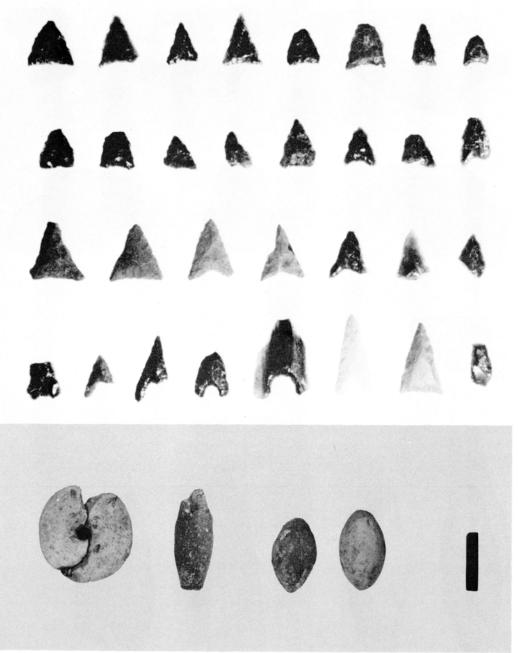
106 原深町遺跡出土石器③ (縮尺½)



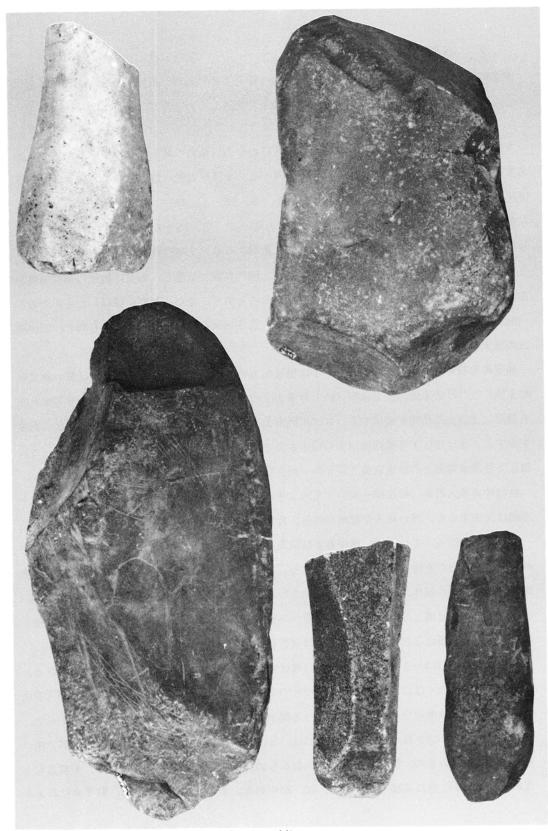
107 原深町遺跡出土石器④ (縮尺½)



108 原深町遺跡出土石器⑤ (縮尺½)



109 原深町遺跡出土石器 その他 ⑥



110 原深町遺跡出土石器⑦ (縮尺½)

2. 石器, その他

原深町遺跡では、各区の溝中あるいは微高地上から各種の石器、石製品および土製品等が出土している。ここでは、これらの出土遺物を種別に記述したいと思う。

石 器

太型蛤刃石斧(挿図92~97) II区からWI区にわたる広範囲の溝中あるいは微高地上から出土する。挿図92~2、94~3、4、95~1、97~2、4 は砂岩製、他はすべて玄武岩製である。III区1号溝の南部溝中からは5個(挿図95~1、3、96~1、97~1、4)出土する。V区からWI区にかけての大溝からは5個(挿図92~4、93~2、3、95~4、96~3)の出土をみる。使用のため刃先から7cm前後で折れたものや、基部から6~9cm内外で折れたものがある。刃先を欠失したものの中には、裏面を先端からの1回の打撃で剝離し、表面に数回の調整剝離を加え、刃先の研磨を行なわないままで使用したものもあり、また、基部が傾斜したものがある(挿図92~1、93~1)。完形品は1個もないが、長さ15cm前後の比較的小型のものと、25cm前後の長大なものの2種類があったようである。

扁平片刃石斧(挿図98-1~5) 1はIII区出土の頁岩製で、裏面は平坦、表は荒い調整剝離を施しただけの未成品。2はIII区の1号溝出土の頁岩製で、火を受けた形跡があり刃部と左右側面および上部裏面が破損する。4はIII区出土の珪質板岩製の逸品。いずれも幅の広い鉋状を呈する。5はIII区1号溝西側出土の珪化木製で、基部は欠失しているが小型であろう。3は、III区1号溝東側出土の粘板岩製で刃先の一部を残すのみだが、柱状片刃石斧かもしれない。

柱状片刃抉入石斧(挿図98-6) V区2号溝出土の1点のみ。断面はかまぼこ状で刃先と基部は欠失するが、浅い抉入が認められる。頁岩製。

石庖丁(挿図99-1~7) 溝中および微高地から7個出土。いずれも孔の部分で破損した破片である。背が直線で刃が大きく外湾する。1はVI区の大溝から出土。2はIII区の1号溝西側の微高地上から出土。3はI区の微高地上のピットから出土。4はV区2号溝から出土。5・6は、IV区の2号溝と5号溝との中間位置から出土。7はIII区1号溝西からの出土で幅は狭く、片刃である。材質は3だけが砂岩で、他は頁岩質砂岩である。

石 鏃 (挿図 $103-1\sim30$) I 区から MI 区の全域から出土する。下のように分類できる。 抉りがきわめて浅くほぼ直線の基部をもつもので、この中には刃部が直線で細長いもの(安山 岩製で中央部だけ磨いた 1 例を含む)と、刃部が外反して丸みのあるものとがある($1\sim7$ 、 $9\sim11$, 17, 18, 30)。抉りがやや深いものは、8, $12\sim16$, $19\sim21$, 24。抉りがU字形で深い ものには、細長いもの、短いもの、丸みのあるもの、尖鋭なもの等各種見られる。未製品も 1 点ある $(25\sim29)$ 。他に基部を欠くもの、22, 23がある。また、遺跡全域から、数千点におよぶ おびただしい黒耀石の細片が出土した。まったく不規則な割れ方で石鏃の材料とは考えられず、 石核調整破片とも思えない。石鏃の大半は黒耀石製である。

石 製 品

管 玉 (挿図 103-37) 土器や木器が最もまとまって出土した V 区の大溝左岸近くの砂層から 1 点だけ出土。長さ3.15cm,径 0.6cm,孔は径0.3~0.4cmで両側から穿孔。碧玉製。

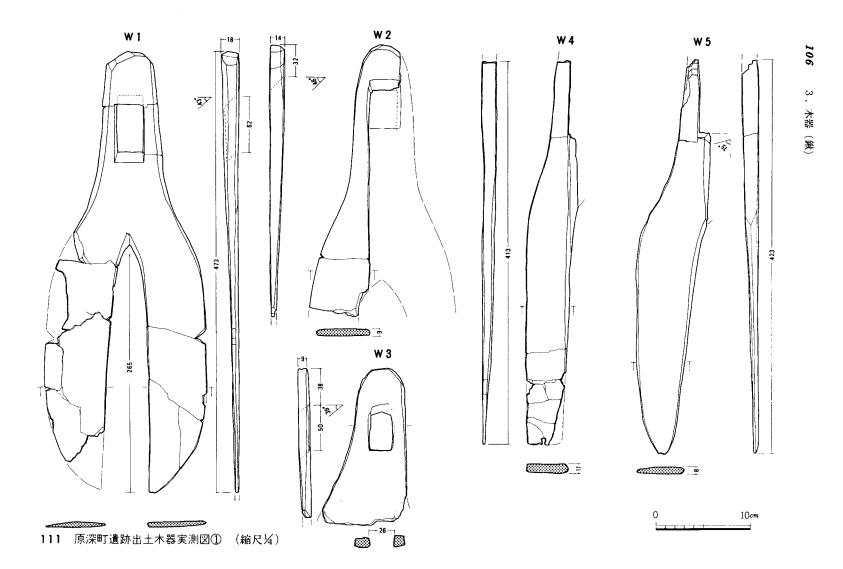
石 錘 (挿図99-8・9・10) 有溝石錘 2 個と未製品 1 個の計 3 個出土。 8 は両端が尖り、断面は円形を呈する。長軸方向には等間隔で 6 条の溝があり、それと直交する溝が 1 条短軸をめぐる。 V区 2 号溝西側の微高地上から出土し、滑石製で重量 120gである。 9 は V区 2 号溝出土。竹の子形で断面は円形を呈する。中央に孔があり、この孔から頭部を通る幅広い溝が、さらにそれと直交するように頭部先端から約 1 cm下に 2 条の細い溝が掘られている。また中央の孔と器の下端との中間にも孔がある。滑石製で重量 170gである。10は 9 と形は似るが、上半分を磨いただけの未製品である。砂岩製で重量 168g。 IV区 3 号溝東側から出土。

砥 石 (挿図 100~102) 大小各種ある。荒砥、中砥、仕上砥に分けられる。また、器形の大小は置砥と提砥の違いであろう。用途は石器や金属器等の研磨が考えられるが、その判断は困難。挿図 100~2はⅢ区1号溝出土。花崗岩製で6 面を使用し、断面が六角形を呈す。砥石面の中央部はややくぼむ。3 も花崗岩製でⅢ区から出土。挿図 102~1 は V 区 2 号溝出土。長さ 8.7cm、幅 1.8cmで、断面長方形の上面のみを使用。砂岩製。2 は砂岩製で長さ18cm、幅8 cm、断面長方形で上面のみを使用。砥石面の長さ12.4cm、幅5.6cmで中央部がくぼむ。IV 区5 号溝西から出土。以上が荒砥である。荒砥よりきめが細かく中砥と思われるものがある。挿図 100~4 は細粒砂岩製で長さ10.5cm、幅4.5cm、断面方形で、V 区 2 号溝出土。挿図 101~2 は砂岩製でΨI区5 号溝東出土。挿図 102~3 はⅢ区1 号溝出土。硬砂岩製の大型で、砥石面の長さ15.8cm、幅9 cm、断面は長方形で裏面と左側面も使用している。これらよりさらにきめ細かく滑らかな次の2 個は、仕上砥であろう。挿図 100~1 は VI 区 2 号溝出土で火成岩製。挿図 102~4 は頁岩製の大型品で、長さ27cm、幅12.4cmの扁平礫の裏、側面等5 個所を使用する。

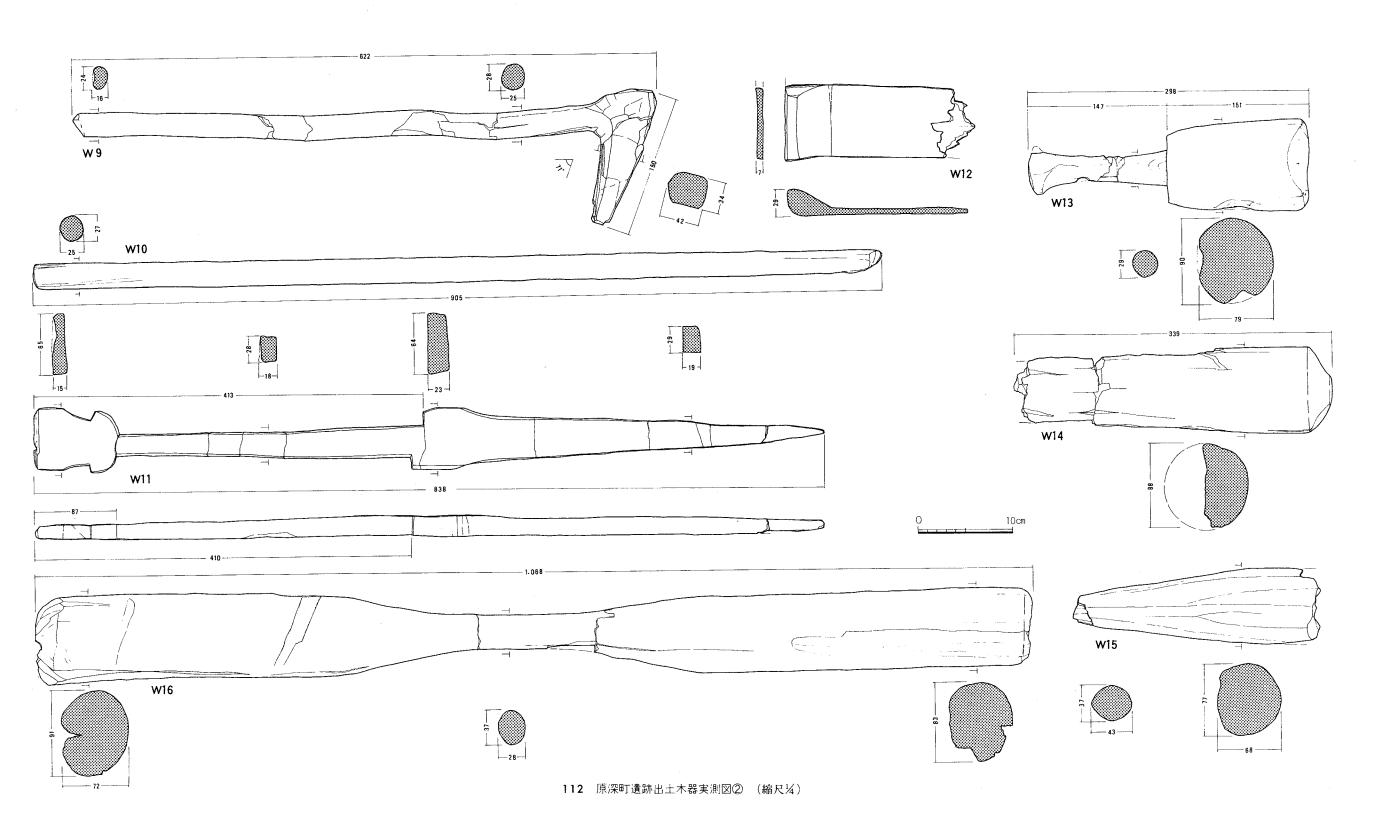
土 製 品

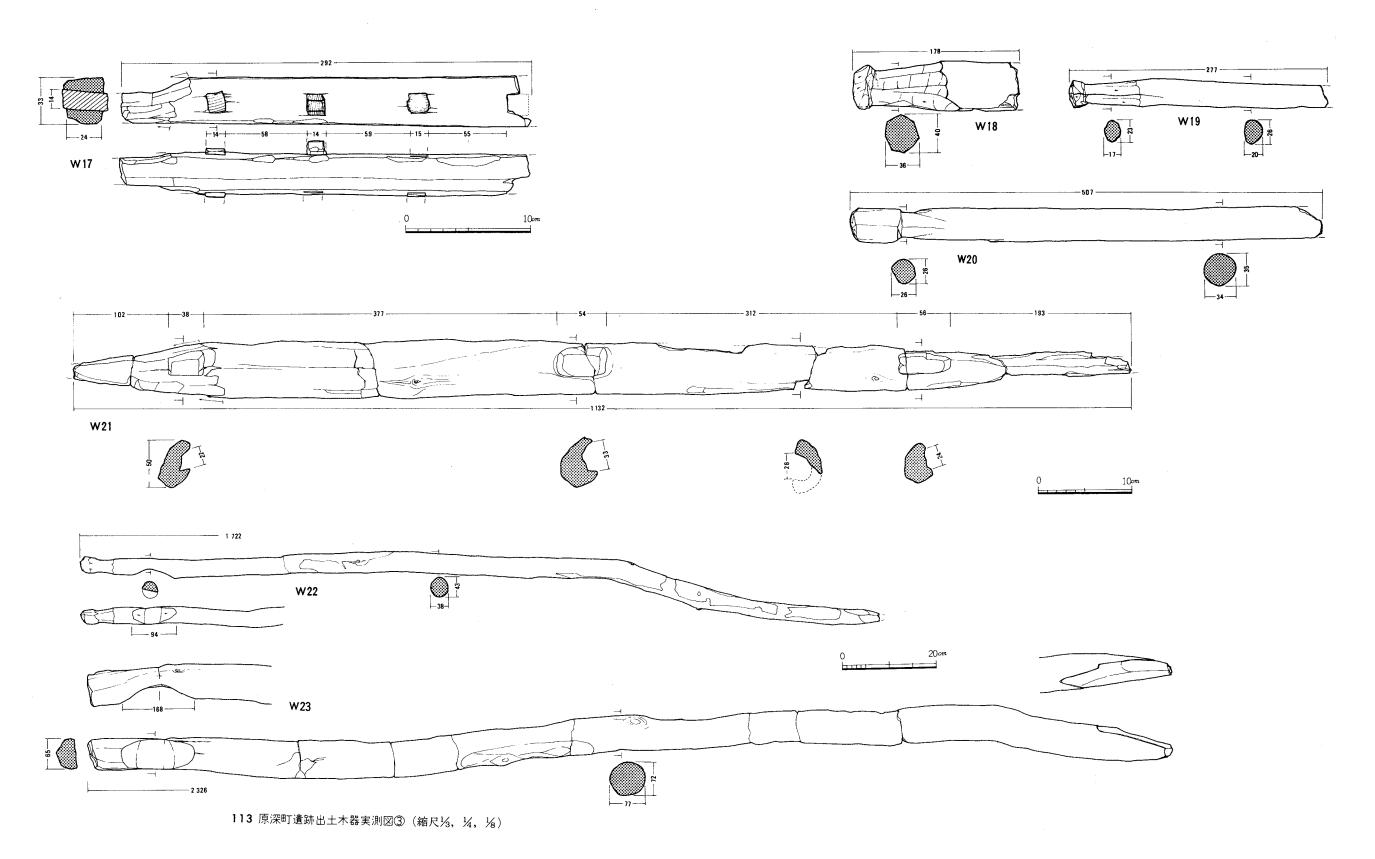
紡錘車(挿図103-33) Ⅲ区から 1 個出土。直径 5.1cm, 厚さ中央部で 1.1cm, 外側 0.9 cm, 孔の直径 0.6cm。一部欠失するが現存重量30g。

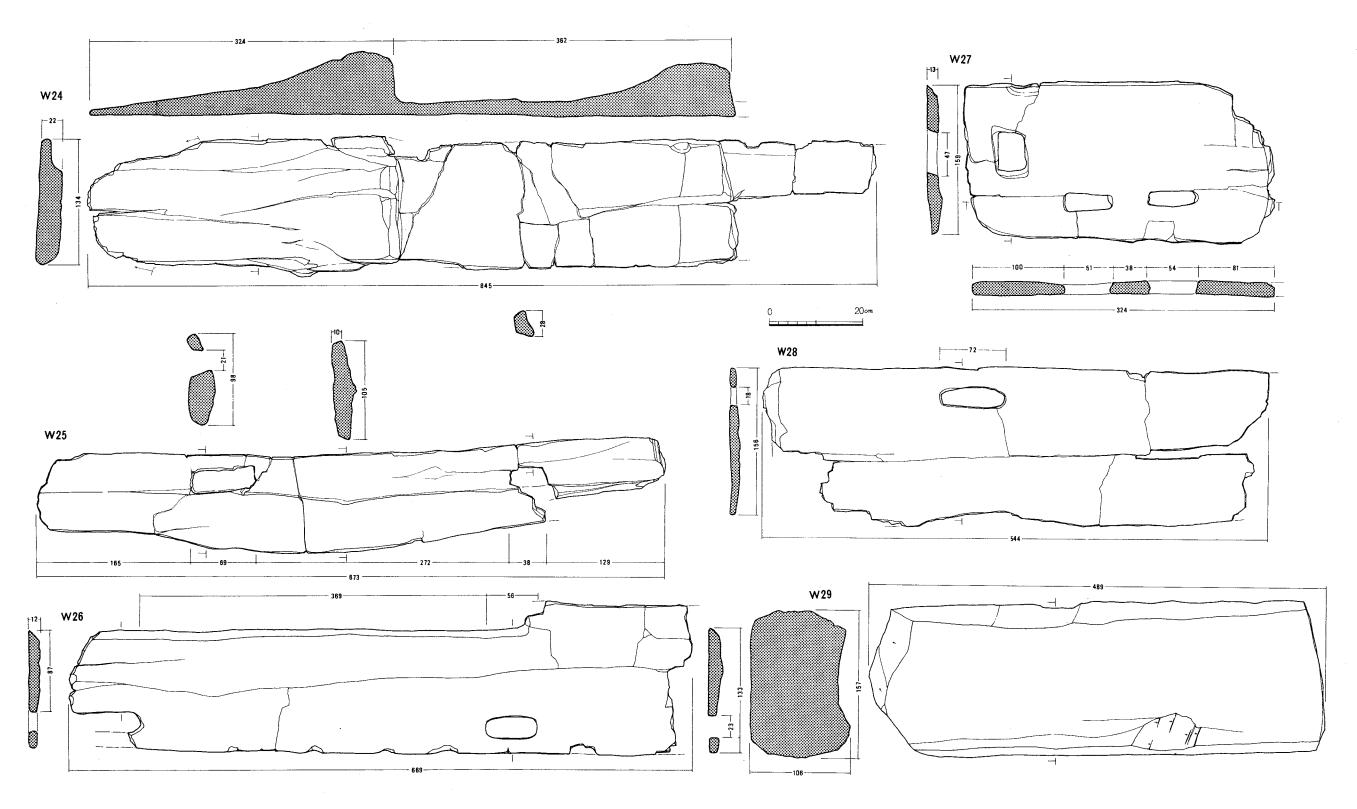
投弾形土製品(挿図 103-34・35・36) 3 個出土。34は IV区 5 号溝西側出土で長さ4.6cm,幅 2.5cm,重量20 g 強。35は I 区 1 号溝出土。長さ 4.4cm,幅 2.3cm,重量20 g 強。36は IV区 5 号溝西側出土,長さ4 cm,幅 2.2cm,10 g 強。いずれも両端の尖るラグビーボール状である。土 錘 (挿図 103-32) III区 1 号溝出土の 1 点のみ。管状で長さ 5.3cm,径は中央部 2 cm,両端が 1.1cm,孔の直径 0.5cm,一部欠失するが現存重量20 g 弱である。



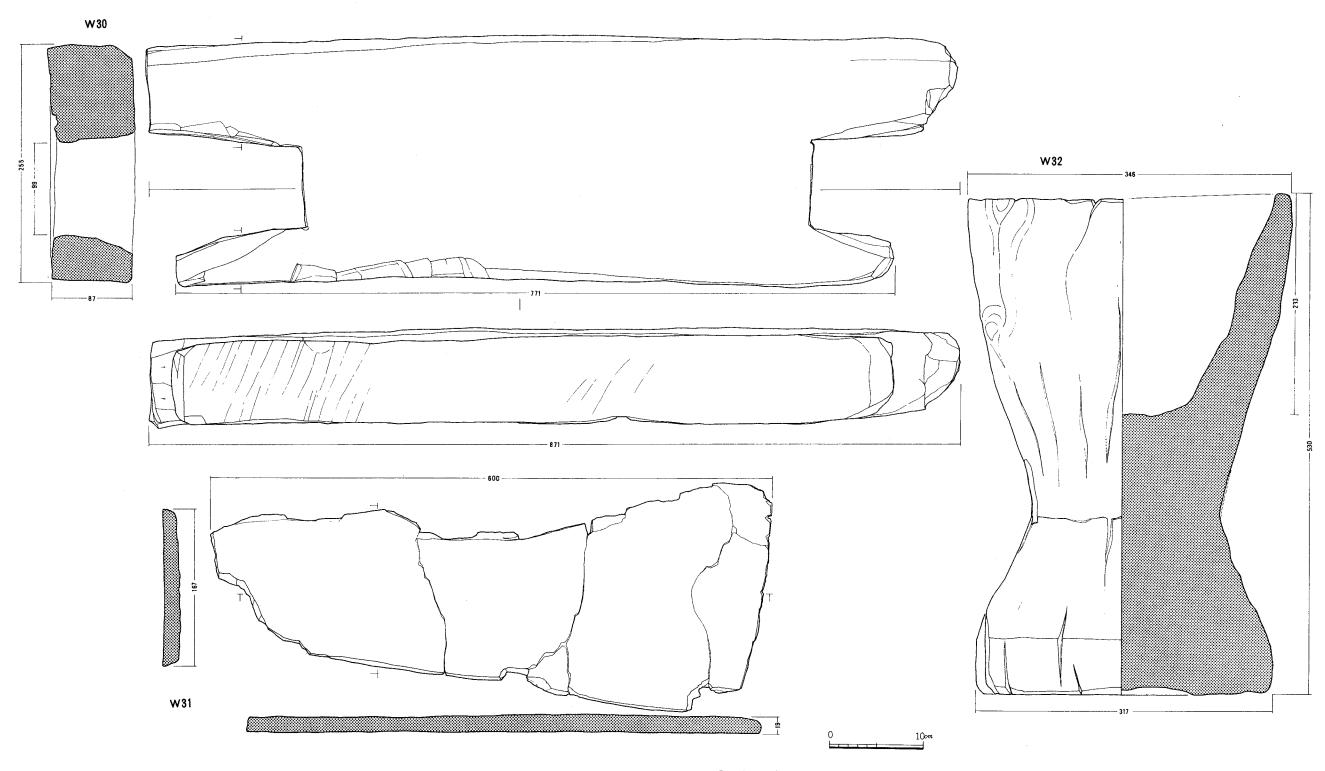
£ .



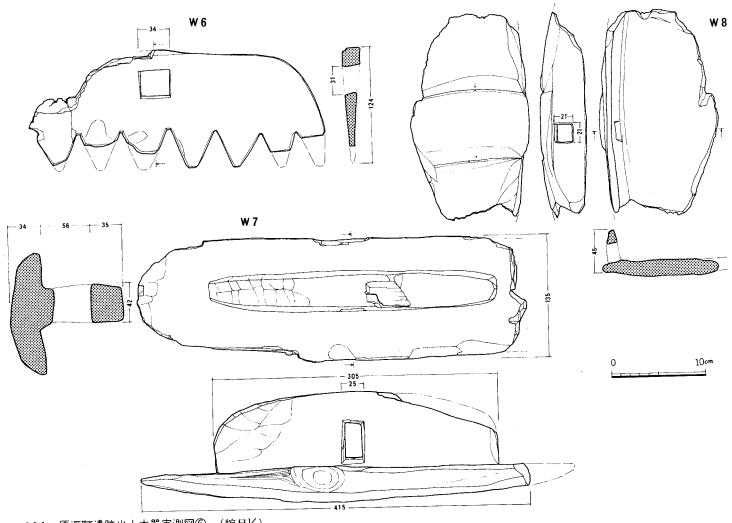




114 原深町遺跡出土木器実測図④(縮尺¼)

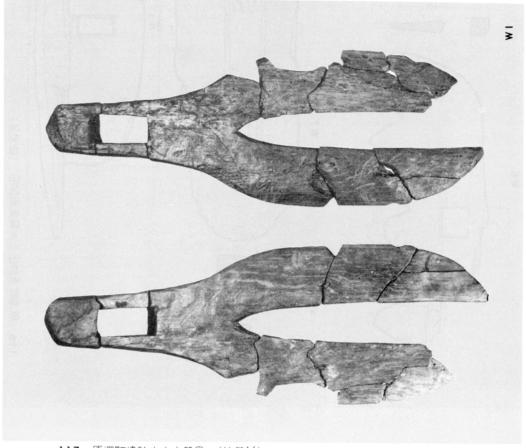


115 原深町遺跡出土木器実測図⑤ (縮尺¼)

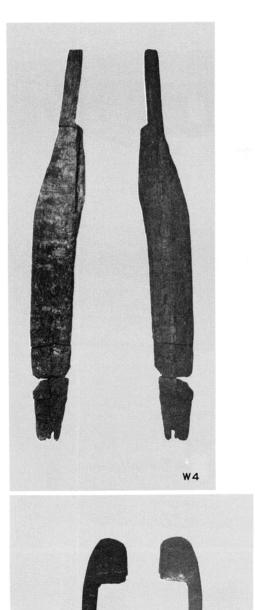


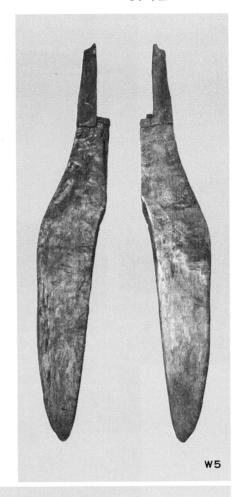
116 原深町遺跡出土木器実測図⑥ (縮尺¼)

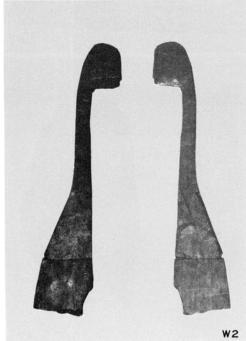


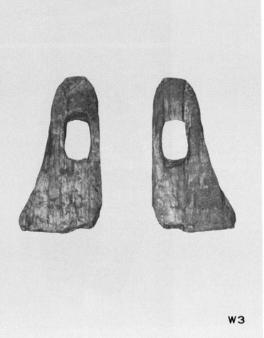


117 原深町遺跡出土木器① (縮尺¼)

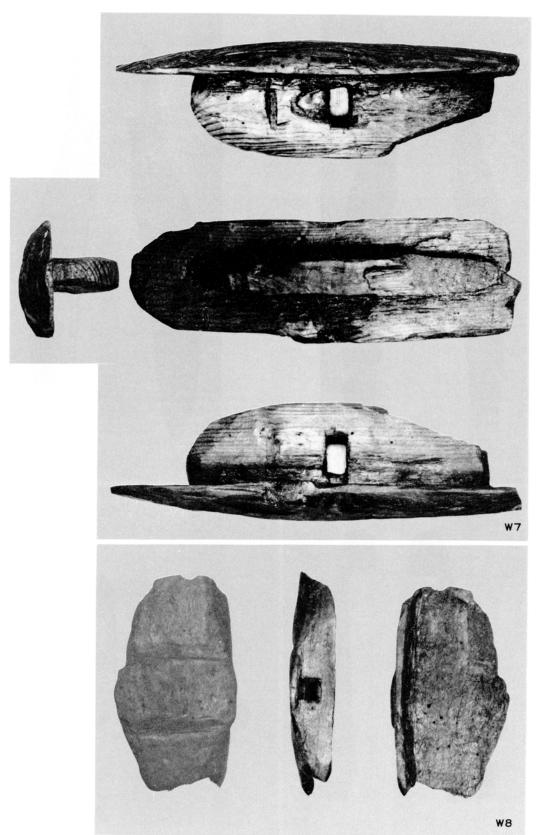




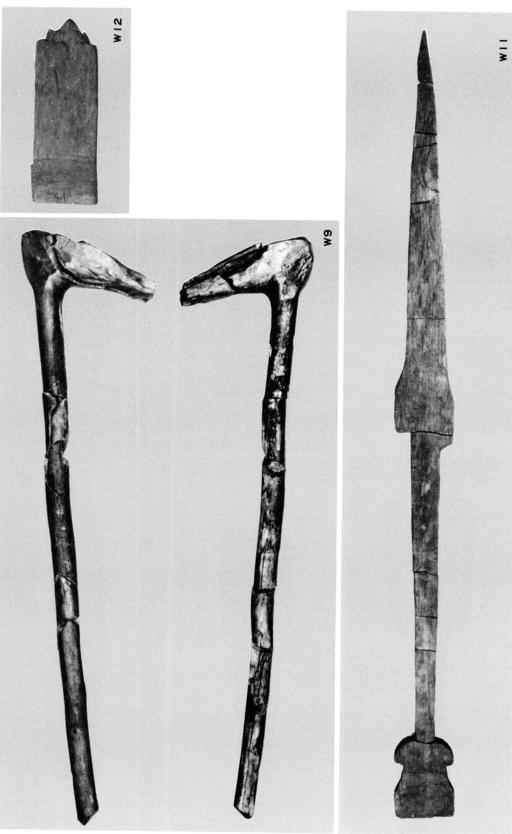




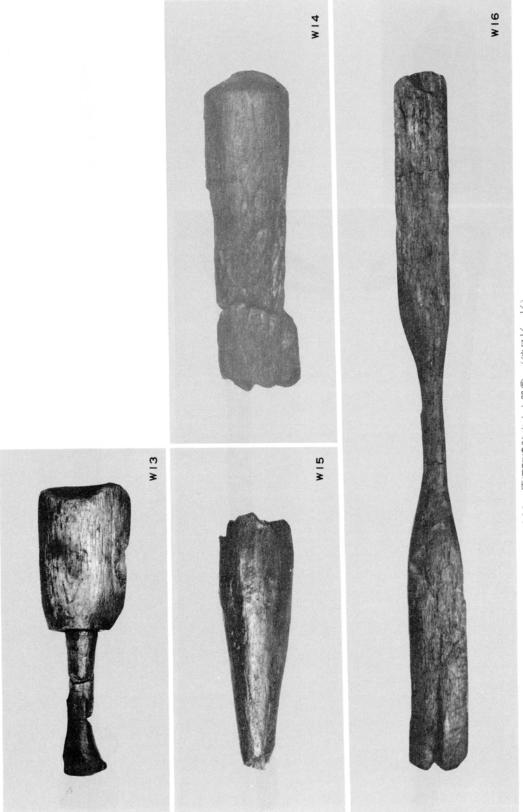
118 原深町遺跡出土木器② (縮尺¼)



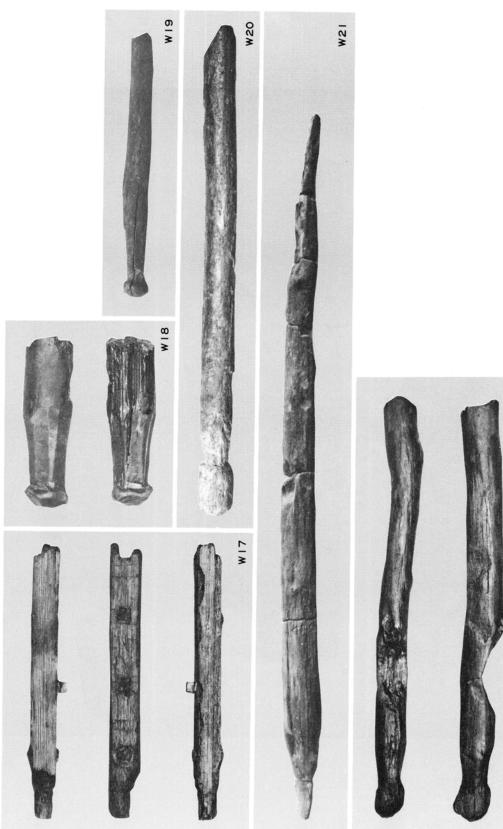
119 原深町遺跡出土木器③ (縮尺¼)



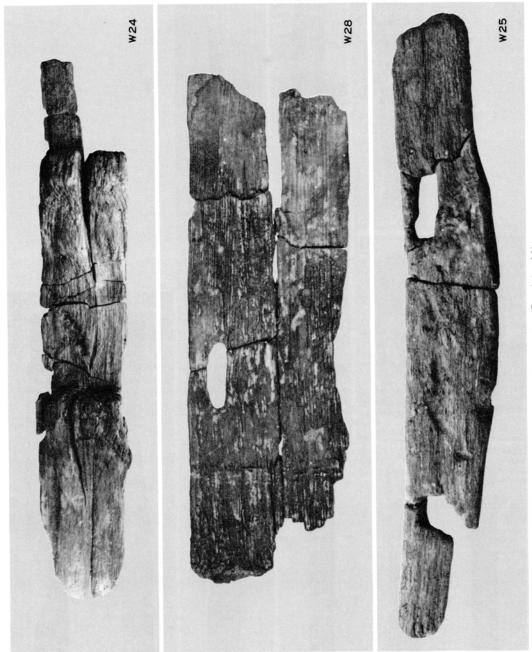
120 原深町遺跡出土木器④ (縮尺¼,%)



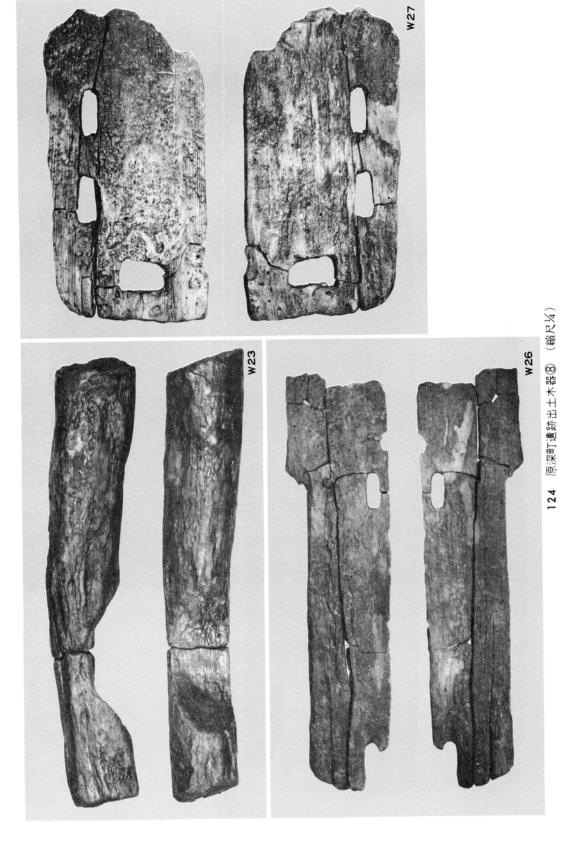
121 原深町遺跡出土木器⑤ (縮尺¼, %)

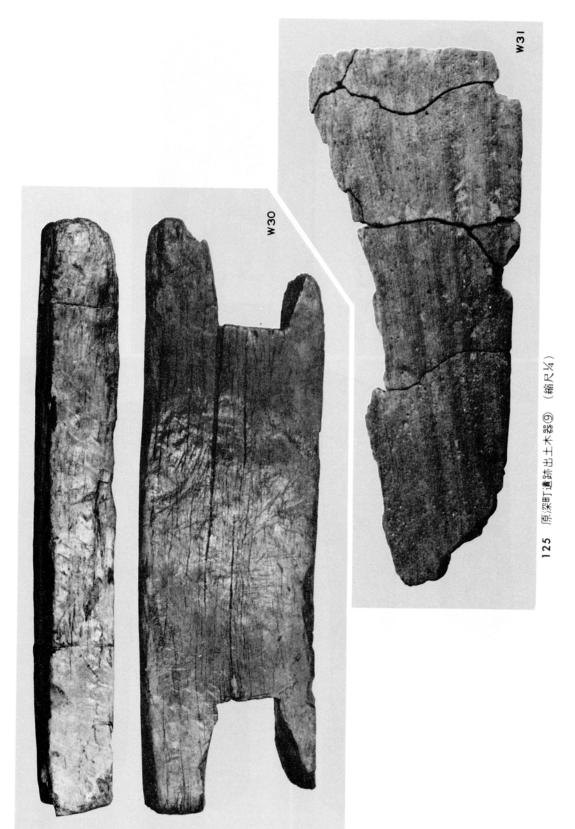


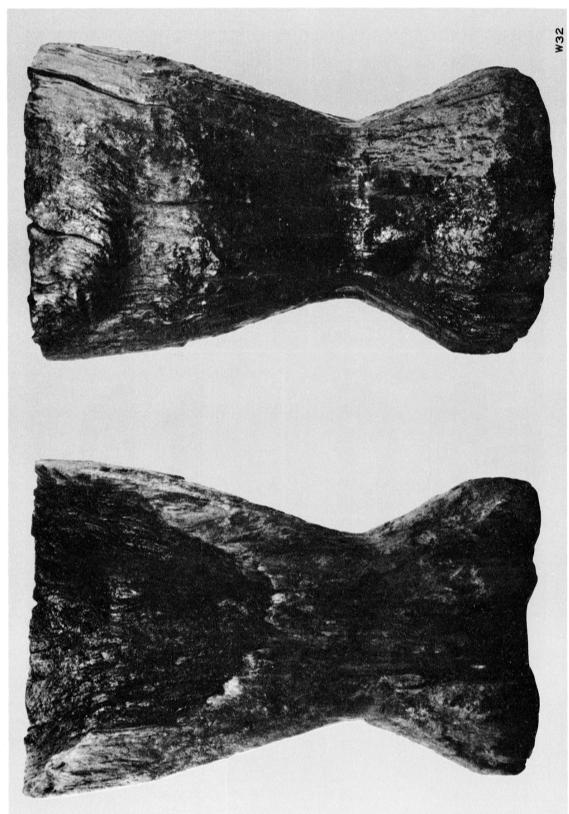
122 原深町遺跡出土木器⑥ (縮尺½, ¼)



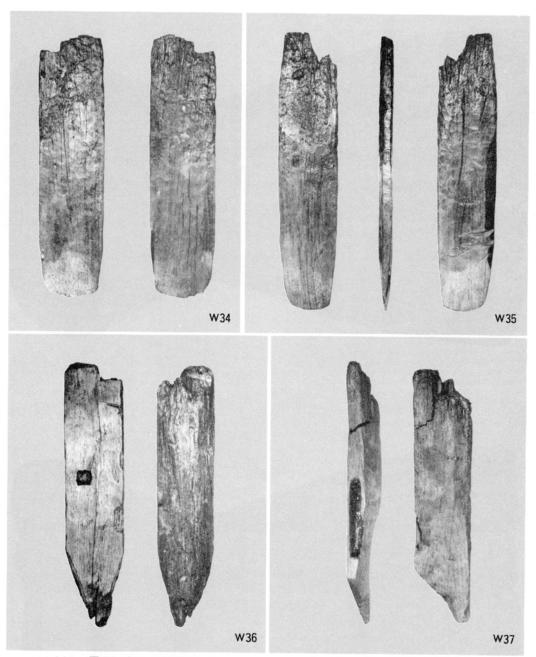
123 原深町遺跡出土木器〇 (縮尺¼)







126 原深町遺跡出土木器⑩ (縮尺¼)

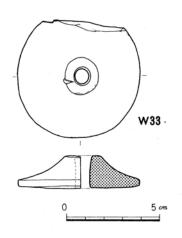


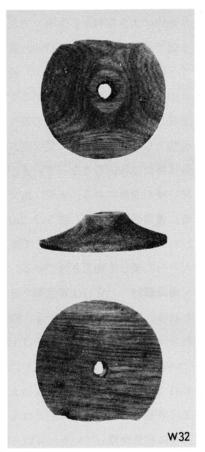
127 原深町遺跡出土木器⑪ (Ⅲ区第1号溝杭(縮尺¼)

3. 木 器

原深町遺跡より出土する木器は、農具、生活用具、建築部材、および杭である。この外に流木や堰構築材などもあるが、今回の報告では加工の認められるもののみにとどめた。また木器の樹種については現在九州大学農学部木材理学研究室に依頼中である。

農 具 農具には鍬と鏝、えぶりがあげられる。W 1~5は二又鍬でW1のみが完形品である。W1は二又 鍬で出土時は完形品であったが整理時に一部を粉失した。 全長は 473mm、刃部長は 265mmである。柄つぼは長方形 となっており、柄との角度は43度である。刃部の中位の 外側面には三角形の抉りこみが見られる。W2は頭部縦 ½のみであるが内側面の又状部がわずかに残っており二 又鍬であることがわかる。W3は鍬の頭部のみで身を欠 いている。柄つぼは長方形で腐蝕のためか隅丸となって いる。W1と同じように二又鍬となるであろう。W4は 縦に½を欠いている。長方形の柄つぼを持つ二又鍬であ ろう。刃部先端は側面に対し直角をなし、W1・5とは 形態を異にしている。W5も縦½を欠くが二又鍬でわず かに柄つぼを残している。柄との角度は15度を測る。W 6はえぶりでわずかに歯と身の一部を欠いている。柄つ ぼは36×31mmの長方形で柄はほぼ直角に近い角度で挿入 されたものであろう。現在歯の本数は7本が残っており、 柄つぼに対して左右対称につくられていたとすれば総数 は8本で、刃のつくり出しは鈍い。歯の一部に焼けた痕 跡が認められる。W7は発掘時に握り部の一部が損傷し たがほぼ完形に近い。握り部は細かく加工されているが 底部は粗い削りのままであり、握り部の長方形孔の穿孔





128 原深町遺跡出土木器⑫(縮尺½)

も雑である。この孔には指1本しか入れることができない。水を含んでいるためか重く,この重さに意味があるのであろうがきわめて保持しにくい。

生活用具 生活用具には手斧柄、杵、臼、木槌、紡錘車ですべて大溝からの出土である。

W8は三辺が欠損しており全形を知りえない。断面が「L」字形に削り出されており,板状の 底部(?)裏面には「V」字状の溝が2条並行して彫られている。底部から高さ32mmで突出部 があり,この中央に21mmの方形孔を穿っている。W9は手斧柄でW16の杵と重なって出土した。 木の二又部を利用したもので小枝が柄部となっている。柄部の長さは55cmである。幹にあたる 頭部は細かく加工されている。手斧が着装される部分は断面長方形で,角は面取りがおこなわ れているが、どの位置まで挿入されたかは明瞭でない。頭部と柄部とのなす角度は71度である。 W10は直径約27mmの棒状の木器で、両端の削り切断の外は特別な加工痕は見られない。しかし 木取りは芯持ちの丸太材からではなく,板材を削り出している。W11は第 4 号溝より出土した もので完形品である。全長 838mm, 約20mmのほぼ均一の厚さとなっている。図左側は鍬頭部に 類似した形をなし,両側面には抉りがある。図右側は両側面を削り尖らせている。W12はかな り直径の大きな材から木取りされているが、全形は不明である。槽であろうか。W13は小さな 木槌で握り部の長さは 147mm, 直径は29mm, 槌部の直径は90mm, 長さは 151mmを測る。きわめ て丁寧な加工が施されており,槌部には使用時の欠損はない。W14~16は杵ですべて大溝から の出土である。W14は頭部のみで,直径は88mmである。頭部は垂直に切断されていないがよく 磨耗している。W15は中央の握り部近くである。体部には縦の加工痕が見られる。杵か木槌か 判然としないが、側面に使用痕がないことから杵と考えた。W16は完形品で全長1,068mm, 全 体に断面は楕円形となっている。握り部には特別な作り出しはない。図左側の体部には斜めの 深い傷が無数にある。W32は臼で第2号堰の背面,N区第1号溝の南東延長部よりの出土であ る。底部径は 317mm,深さは 233mmを測る。底部は平底となっており,体部中位のやや下でく びれている。全体的に腐蝕して加工痕は見られない。W33は紡錘車で直径66mm,高さ17mmで, たいへん美しく加工されている。孔は上面が大きく9×10mmである。

建築部材 W17はWI区第7号溝より出土したもので、図左側は削られており二次加工と思われる。図右端は折れている。断面は33×24mmの長方形で、約70mm間隔で方形の柄穴があり、現在4個を数える。この柄穴は上面に対して垂直に穿たれてはいず、模状の角材が挿しこまれている。W18~20は材の一端が乳頭状につくられたものである。W18は大溝の護岸用杭列に使われていた。W19は大溝から出土。W20はIII区第1号溝からの出土である。W18の乳頭部の加工は鋭利で断面形は7角形となっている。W19・20は腐蝕が進んで加工痕は明瞭でない。W18のみに樹皮が残っている。W21~23は第2号堰の構築材に転用されていたもので、W21・22は立杭に、W23は横木に使用されていた。W21は全長1、132mm、図左側は全周を削り尖らせている。欠き込みは同一面に3か所、その裏面に1か所見られる。欠き込みの間隔は377・312mmで、欠き込みは長方形であるが、いずれも材の芯に垂直に彫りこまれていない。また欠き込みの大きさ深さともに規則性がない。W22はW18~20と同じように材の一端に乳頭状のつくりがあるが、

W22はさらに逆台形の欠き込みがある。芯持ちの丸太材を使っており, 一部に樹皮を残してい る。図右端は削りで尖らせ杭として使われていたが,図左側の加工と同時期であるかは明らか にしえない。乳頭状の加工をしている方が樹根側である。W23も図左側に欠き込みを持つ材で ある。W22の直径が43mmであったのに対してW23は直径77mmと大きい芯持ちの丸太材である。 図右端は尖らせているが、削りは全周からではなく¼は樹皮を残している。全長は 2,326mmで、 小枝は削りおとされている。W24は第2号堰背後の流木より出土したもので、W32の臼とは接 近している。図左側は丸く尖らせているが、2つの突起が残っていることから梯子とわかる。 現存長は 845mm, 幅は 134mmを測る。突起は一方の壁を垂直にし, 他方を斜めに削り出してお り、高さは55mmである。2 つの突起の間隔は 362mmを測る。W25~28は、板材で長方形の枘穴 を持つもので、いずれも第2号堰の杭として使用されていた。W25は図の左側が杭先端部で裏 面からの斜めに削りおとして尖らせている。杭としては原形をとどめているが建築部材として 加工された時の形とは大きく異なるものと思われる。材は均一の厚さではなく両面の加工は顕 著でない。木取りはかなり大きな材の周辺部を用いている。W26は図左側が杭先端部となって いる。厚さ12㎜の板材で,枘穴は2か所に見られ隅丸長方形をなす。枘穴の間隔は 369㎜であ る。W27は厚さ13mmの板材で,挿図29のように横木の下にほぼ水平の状態で出土したもので図 右端は折れているが図左端は原形と思われる。枘穴は3か所にあり、2つは板材の長辺に並行 して38mmの間隔で並んでいる。この2つの枘穴は隅丸長方形で,加工は鋭利でない。もう1つ の柄穴は短辺側にあり、47×36mmの長方形で、やや斜めに穿たれている。W28は厚さ12mmの板 材であるが,両端とも折れている。柄穴は72×25mmの隅丸長方形で1か所のみである。W29は 大溝の第2号堰前面より出土した。断面長方形の角材である。図右端はほぼ垂直に切断されて いるが,図左端は大きな削りでわずかに尖っている。図上面は凹状となっており建築部材とす るよりも工作台と考えるべきであろうか。W30は全長 871mm,幅 255mm,厚さ87mmの「工」字 形をした材で、第2号溝前面より出土した(挿図40)。両端の方形に抉りこまれた部分は鋭利な 加工痕があり,側面は幅約15mmの細かい斜めの加工痕が見られる。W31は第2号堰の立杭とし て使用されていた板材である。厚さは約20mmで全体ほぼ均一の厚さをなす。

N おわりに

原深町遺跡で検出した遺構は第1~7号溝と稲塚川の旧河道と考えた大溝,さらにこれらの 溝に構築された2つの堰とピット群である。ピット群は遺物を出土するのもあるが、平面形が 不整形で、大きさ、深さなどに統一性がなく、並び方も不規則であることから自然の落ちこみ とした。各溝と大溝との関係は、前述したように第2号堰によって大溝の水位をあげて第2、

5号溝に分水するという灌漑用水施設と考えた。この際第2,5号溝の取水口と思われる位置 のレベルは下流と想定した溝北端部の溝底レベルよりも低く、このため発掘時には、水が逆流 することから大溝への排水溝ではないかと推測していた。特に第5号溝から別れている第6号 溝は、北側に16mで終っており排水溝という推測の一根拠でもあった。しかし、大溝に構築さ れた第2号堰の存在や、水量を調整したと思われる第2号溝の堰、あるいは土止めされている 第3号溝が検出されるに至り,各遺構は灌漑用水施設と考える妥当性を強くした。分水溝の溝 底レベルについては、第2号堰の復原、大溝土層図の検討などから第2号堰は分水溝に給水で きる水位の5mまで揚水する機能を持っていたと判断した。このような施設は、その目的が用 水源(流路)より高位にある耕作地への給水であるからには、部分的に分水溝の溝底レベルが 逆になることは、取水口に近ければ近いほど当然考えられることであろう。早良平野では、開 発の拡大、増加とともに発掘例が増え、初期水稲農耕の平野部への進出、定着という過程が明 らかにされつつある。原深町遺跡の周辺では、原談儀遺跡、鶴町遺跡などがあり、沖積地にあ る微高地を核として弥生時代前期から耕地の獲得が進められ、古墳時代前期には用水路を整備 し定着化していることが知られている。原深町遺跡もこれらの遺跡と様相を同じくしているも のの、分水溝と堰の規模から、給水される耕作地は取水口からかなり距離があったものと思わ れ、また分水溝は常時給水されていず乾田経営のあり方を示す遺跡であるということができよ う。このように高度に整備、獲得された灌漑用水施設は原深町遺跡の1か所だけではなく、上 流にも堰と分水溝による耕地化された地域の存在が予想され、第7号溝はその地域からの排水 溝として理解される。このように連続する灌漑法は鶴町遺跡で見られた用水路の補強,修復と いう単に自然の流れを固定した段階よりさらに進んだものと言うことができよう。次に原深町 遺跡の時期であるが、出土遺物の石器は、ほとんどが弥生時代のもので生活跡が近くにあった ことを物語っている。特に一遺跡としては多量に出土した石斧は,微高地の森林伐開や杭など の用材加工に使われたものと思われる。土器は分水溝や大溝で出土したが、夜臼式土器から中 世の土師器、磁器まである。分水溝、大溝からは中世の土器は出土していないが、混在してお り土器によって分水溝と大溝の各時期は決められない。大溝の土器は弥生時代中期後半から後 期までの土器がなく、古墳時代の布留式併行の土器で終わっており、4世紀中頃から後半にか けての土器が主である。このうち弥生式土器は護岸用杭が打込まれている土層より出土してお り大溝の利用が弥生時代中期後半から一時中断することが知られる。これらのことから弥生時 代前期から中期前半までは鶴町遺跡の第1号溝のごとく微高地周縁部の自然河道を利用してい るにすぎず、堰と分水溝とによる耕地の拡大,即ち乾田経営は単に灌漑技術の向上のみではな く、1つの流域における共同体相互の結束を強くする必要があり、すくなくとも流域の指導的 支配者の存在を裏付けるもので、原深町遺跡では古墳時代前期のことであった。

福岡市西区原深町遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第71集 ©1981年3月31日発行

編集 福岡市教育委員会

発行 福岡市中央区天神一丁目7-23 電話 (福岡)711-4667(文化課)

印刷 祥文社印刷株式会社 福岡市博多区博多駅南四丁目15-17 電話 (福岡)411-1611(代表)

福岡

市西区